

# **長野県東筑摩郡波田町葦原遺跡**

## **緊急発掘調査報告書**

1980' 5

長野県東筑摩郡波田町教育委員会

# **長野県東筑摩郡波田町葦原遺跡 緊急発掘調査報告書**

1980' 5

長野県東筑摩郡波田町教育委員会

## 序

このたび葦原地域について、町では地主の要望により、昭和54年度事業として区画の整理と道路新設改良を行なうことになった。しかし、この地域は埋蔵文化財の包蔵地として登録された地域であるために県教育委員会文化課の指導をいただいた。松商学園高等学校ではクラブ活動として昭和39年より発掘を行ない大部分が調査済みになっているが、県の指導としては残された部分のうち道路が新設される 254 m<sup>2</sup>について発掘を行なうことにとのことであった。この道路新設改良事業は町が行なう事業であるために、法に基づき発掘をする経費は町が負担しなくてはならないこと、発掘のために事業が遅延すること等問題はあったが、地主の方々並びに関係各機関の深い御理解を受けて発掘を行なうことができた。発掘に当っては考古学の専門家、大久保知巳先生はじめ考古学会の先生方、町の文化財調査委員、町誌編さん委員、信大生、地主の方々の御協力をいただいた。発掘は2月24日から29日までの6日間行ない、更に3月に入り3日4日の2日間にわたり実施され、数多くの出土品と中世期のものと推定される墓址群が発見された。

今回の発掘により町誌編さんの貴重な資料を得ることができた。本書はその結果を集録したものであり文化財保護の一助となれば幸いと存じます。

尚、今回の調査に際しまして、多大なる御協力、御理解を示された関係各位に心から謝意を申し上げます。

昭和56年5月30日

波田町教育委員会  
教育長 太田 賢一

## 例　　言

1. 本書は葦原地区農道整備事業により道路新設工事が行われるため、発掘調査した長野県東筑摩郡波田町葦原遺跡の緊急発掘調査の報告書である。
1. 発掘調査は昭和55年2月24日から29日、及び3月3、4日にわたり行った。
1. 本書は大久保知巳指導のもと調査員が分担執筆した。しかし調査後十分なる討議の機会をもち得ず、今後の調査研究にまつものが多いが一部遺物の鑑定にあたっては、信大医学部第2解剖助手、西沢寿亮、東京国立文化財研究所の協力を得た。
1. 図版、挿図の作成は調査員全員があたった。
1. 今回緊急調査の出土品は波田町教育委員会の責任において保管されている。
1. 本書の編集は大久保と事務局が行った。

## 目 次

序 .....	波田町教育委員会教育長 太田賢一	1
例 言 .....		2
本文目次、挿図・図版目次 .....		3
第1章 調査経過 .....		5
第1節 調査に至るまでの経過 .....		5
第2節 調査日誌 .....		6
第3節 草原遺跡の過去における発掘調査のあらまし .....		10
第2章 遺跡の環境 .....		14
第3章 調査結果 .....		16
第1節 トレンチの概要 .....		16
第2節 繩文、遺構と遺物 .....		21
1 第1号住居址と遺物 .....		21
2 第2号住居址と遺物 .....		35
3 第3号住居址と遺物 .....		40
4 その他の遺構と遺物 .....		45
第3節 中世 .....		47
1 墓墳（土壙） .....		47
2 築石墓墳 .....		49
3 地下式土壙（地下式墓墳） .....		51
4 溝状遺構 .....		52
5 遺 物 .....		52
6 考 察 .....		53
第4章 結 語 .....		63

挿図目次

- 第1図 波田町遺跡分布図
- 第2図 草原遺跡全体図
- 第3図 Aトレンチ標準層序
- 第4図 A・Bトレンチ4・13区東壁層序
- 第5図 Bトレンチ3～5区北壁層序
- 第6図 Cトレンチ1～17区層序
- 第7図 Cトレンチ18～25区層序
- 第8図 第1号住居址
- 第9図 第1号住居址出土土器
- 第10図 “
- 第11図 “
- 第12図 “
- 第13図 “
- 第14図 第1号住居址出土石器
- 第15図 第2号住居址
- 第16図 第2号住居址床面下出土土器及びA・Bトレンチ出土石器
- 第17図 第2号住居址覆土出土土器及びA・Bトレンチ出土土器
- 第18図 第3号住居址
- 第19図 第3号住居址出土土器
- 第20図 第3号住居址出土土器・石器
- 第21図 第3号住居址出土土偶
- 第22図 地下式墓壙の平面及び断面図
- 第23図 第1号～3号集石墓壙・第1～第6号墓壙
- 第24図 第7号～17号墓壙・第4号集石墓壙・地下式土壤
- 第25図 第5～9号集石墓壙・第18・19号墓壙
- 第26図 第10～13号集石墓壙・第19・20号墓壙
- 第27図 第21～23号墓壙

図版目次

- 図版第1 上 草原遺跡全景  
下 A・Bトレンチ発掘状況
- 図版第2 上 第1号住居址  
下 第1号住居址遺物出土状態
- 図版第3 上 第2号住居址炉址  
下 第2号住居址周辺炭化物
- 図版第4 上 第1号 集石墓壙  
下 第3号 集石墓壙
- 図版第5 上 第7号 集石墓壙上面  
下 第7号 集石墓壙下面
- 図版第6 上 第12号 集石墓壙  
下 地下式墓壙
- 図版第7 上 第4号 集石墓壙の下面  
下 第22号 墓壙
- 図版第8 上 第13号 墓壙  
下 墓址供養慰靈祭
- 図版第9 第1号住居址出土土器
- 図版第10 第1号住居址出土土器
- 図版第11 第1号住居址出土土器
- 図版第12 第1号住居址出土土器・石器
- 図版第13 第2号住居址上面下面出土土器  
(上段) Aトレンチ出土 土器  
(下段) 石器(右下6点)
- 図版第14 1、鉄鍔 2、古鍔 3、たがね  
(上)、釘(下)、4、炭化物
- 図版第15 5 上段 中世陶器、下段 鉄滓  
6 左側2列中世陶器、右側2例鉄滓  
7 丸山文夫氏藏 勾玉

# 第1章 調査経過

## 第1節 調査に至るまでの経過

昭和54年度事業として波田町葦原地区において道路整備事業がおこなわれることになった。この地区一帯は縄文時代の非常に密度の高い遺跡として知られており、最近では松商学園地歴部の野外学習の一環として昭和39年より12回におよぶ調査がされている。このため、県教育委員会文化課並びに町関係各機関と協議し工事着工前に道路が新設される約250m<sup>2</sup>について発掘調査を行ない、記録保存することになり、波田町教育委員会が主体となり緊急発掘調査を実施することになった。

発掘調査にあたっては調査団長に大久保知巳先生をお願いし、調査員には中信考古学会の諸先生方を、また調査補助員には信州大学考古研をお願いした。調査員の先生方はそれぞれ本務及び他の調査等仕事をお持ちの中で調査を実施し、しかも、調査終了から短期間において遺物諸資料の整理、執筆と多大なる御協力を賜り心から感謝申し上げます。

また、地元の方々には調査にあたって深い御理解を賜り発掘調査が無事終了することができ厚く御礼申し上げます。

発掘調査のための組織は次のとおりである。

### 波田町葦原遺跡調査会組織

顧問	波田町長	川澄聰雄
	議會議長	百瀬喜八郎
	助役	志尾木 操
会長	教育委員長	平林 一夫
副会長	委員長代理	百瀬克彦
委員	教育委員	中野一正・太田憲司
	教育長	太田賢一
	文化財調査委員	
		田中昭三・百瀬兼雄
		大月敬造・塩原敬一郎
		百瀬長男
	町誌編さん (古代・中世)	百瀬光信・大月康雄
事務局長	教育長	太田賢一
事務局	建設課	深沢一・小林富士男
		勝山茂・百瀬勇二
	教育委員会	波多腰賢司

### 波田町葦原遺跡発掘調査団

団長	大久保知巳	日本考古学協会員
調査員	倉科 明正	"
	神沢昌二郎	"
	小林 康雄	"
	中島 豊晴	"
調査補助員		
	宮城孝之・上野山恭和・石渡俊一・白崎卓	
	永井ちひろ・田中正二郎・加藤浩史・奥山元彦(信大)	
	山越正義・田中昭三・百瀬兼雄・	
	大月敬造・塩原敬一郎(文化財調査委員)	
	百瀬光信・大月康雄(町誌編さん古代・中世)	
調査協力者		
	中野孝男・武居英昭・中村芳郎・中野房江 千野四	
	女子・中村直夫・中村高・荻原スミ・稔 中野武子	
	中野俊子・振旗鉢一・丸山正一郎・三村泉・百瀬泰	
	隆・清沢能成	
事務局	現場主任 波多腰賢司	
	会計主任 勝山 茂	

## 第2節 調査日誌

昭和55年2月24日(日) 晴 朝方は零下6度位の気温低下を示す。日中は静かで暖かくなる。  
参加者 調査会、平林教育委員長、太田(賢)教育長、太田(憲)教委、波多腰主事。調査団、大久保、倉科、神沢。調査補助、宮城、上野山、石渡、永井、白崎、田中(昭)、大月(康)百瀬(光)、百瀬(兼)、大月(敬)、山越。作業協力者、9名。

午前9時、調査関係者一同参集後、調査に先立ち、平林一夫教育委員長、太田賢一教育長、大久保知已調査團長のあいさつがあり、著名な葦原遺跡の紹介と共に、発掘調査上の諸注意についての要望がなされる。その後、直ちに作業にかかり、調査箇所へA・B・C各トレンチ設定を行う。本日は、A・B両トレンチの各1区より13区にわたる、発掘にかかる。作業終了までの調査結果では、各区、-30~-45cmの層間より、縄文中期後半土器若干づつと、縄文後期初頭土器片微量、石器として、打製石斧、凹石、石鐵等検出する。又、遺構としては、Bトレンチ12区の一20cmの第2層暗褐色土上面に、外径40×43cmのコの字形の配列をみせる石圓があり、その石圓の中央部に古錢一枚を遺存する集石墓址が発見された。A・B両トレンチの各13区には、その境にまたがり、-16~-33cmの第1層黒色土内に集石墓址が発見され、その内部より内耳土器片数片が出土する。予期しない遺構が、第1層の黒色土内で、然も浅い層間に残存してみられる点、注意された。遺跡地の等高線を含めた範囲全体測量なども、本日より開始する。

2月25日(月) 晴 朝方は零下数度となる。日中は暖かさをかいふくする。

2月末における発掘のこととて、昨日作業終了後、発掘によって検出された遺構の上部に、シート類を厚くかけ、凍結による損壊防止の手配をしておいたが、それでも霜柱が5cm程も、全面にたちのぼる有様であった。

参加者 調査団、大久保、倉科、小林。調査補助、白崎、宮城、上野山、石渡、永井、田中(正)、平林、太田(賢)、太田(憲)、波多腰、大月(康)、百瀬(光)、田中(昭)、百瀬(兼)。作業協力者、14名。

昨日に引続くA・B両トレンチの発掘と、Cトレンチの発掘調査に入る。昨日以来、土器を多量に出土していたBトレンチ3、4区は、住居址の直上にあたっていることがわかり、早くも第1号住居址と命名し、遺物の処理、遺構の検出にあたる。昨日の時点では、縄文中期の勝板式系相当の土器など、比較的多かったが、それらの下層からは、個体のまとまった藤内式期の大形土器片などが、検出されはじめる。遺物のとりあげは明日にもちこしたが、出土状況の写真など何枚かとる。Aトレンチの6、7区の南壁寄りにも半月状の床面があらわれ、これを第2号住居址とした。又、Bトレンチの7、8区を中心にして、1部6、9区にかかり、第3号住居址が姿をみせはじめる。8区には、約120cm円形の範囲に、人頭大以上の大きさの自然石による集石と、その内部や周辺に、多量の土器片が混在出土する。又、A・Bトレンチ各11区に、浅い方形状の落込みと、Aトレンチ11、12区にわたり、70×80cm、-25cmの落ち込みを認める。Aトレンチ12区の-28cm面に集石墓址が検出される。A・Bトレンチ各13区の集石墓址内からは、内耳土器

の出土をみたが、集石内に完形の石皿1個が含まれていた。A・Bトレンチ4区東壁、同13区西壁セクションが計測され、土枠が除去される。A・Bトレンチ内出土遺物としては、縄文中期全般に亘る土器片が、リング箱1個程度と、石器では、石皿、打製石斧、凹石が主なるものであった。Cトレンチでは、遺物の出土は殆んどなく、本日のところ1～3区にかけて、下層のローム面上に、ピットなどが1部検出されはじめる。

2月26日（火）曇 終日深い曇天で、寒い南風が野を吹きさす。

参加者 調査団、大久保、倉科、神沢。調査補助員、田中（正）、白崎、宮城、上野山、石渡、永井、大月（康）、百瀬（光）、田中（昭）、大月（敬）、塩原、波多腰。作業協力者、9名

作業は、A・Bトレンチ内全般にわたる継続発掘と、Cトレンチ1～25区にわたる各区の全面発掘が行われる。主なる調査結果は、下記の如くであった。

1、A・Bトレンチ内の第1号住居址内の土器のあらいだし、写真撮影、平板測量等行われ、午后に入り土器のとりあげがなされる。

2、2号住居址の、床面下の発掘が昨日より行われているが、今日は、更に下層への調査が続行される。その結果、3号住居址の床面、石圓炉の検出を見る。大成功であった。

3、Aトレンチの、1区より13区にわたる南壁セクションの計測が行われる。

4、本日、Cトレンチ内各区全面の発掘が行われる。その結果、当初全く予想もしなかった、中世所属とみられる墓址群の遺構が、30cm前後の黒土層内より、密集状態で検出されはじめる。これらの遺構内に包蔵された遺物としては、中世末期に活用されたとみられる内耳土器片や、鉄滓が主であった。墓址は大別して2通りの形態があり、その1は、深浅の差異が認められる、方形乃至は円形のピットを形成する土壤状のものと、その2は、浅い掘り込み内の上面に、鶏卵大乃至は人頭大以上の石を集めた集石状を示すものとの二態を認めた。又、集石墓址の上面より、地点を異にして二箇所から、長さ10～20cm程度の細い骨が検出されたが、人骨か獸骨かは不明で、信大の西沢寿亮氏への鑑定を午后に入り依頼する。遺構内より鉄滓の出土がめだつところから、周辺地区の銀治関係者の歴史や、地名等の追求も必要を感じ、その方面的取材調査にも心がける。このCトレンチの遺構の中、集石墓址関係はその殆んどが黒土層内の検出で、非常に難かしい作業であったが、残存遺構を破壊することなく、調査できた技術は、高く評価されてよい。多数の墓址群の検出により、明日は現場において慰靈祭を行い、供養する手配をたてる。

2月27日（水）曇 昨夜、小雨を催し、日中は曇天で午前中暖かく、午后夕方より寒くなる。

参加者 調査団、大久保、倉科。調査補助員、永井、田中（正）、白崎、宮城、上野山、石渡、田中（昭）、大月（康）、百瀬（光）、大月（敬）、波多腰。作業協力者8名。

1号住居址の掘り下げが続行され、土器のとりあげがなされる。表土下約83cmの下層に床面が発見された。床面は固く、平坦に近く、周壁のあらい出しが行われたが、その全容については、明日にもちこされる。3号住居址の床面に、形の整った方形の石圓炉が発見され、本日、炉内の精査がなされる。内部には黒土と焼灰の他、遺物はなかった。この炉址の北西の縁辺に、27×37cmの半月状の範囲に、くるみの実の殻の炭化物がまとめて出土する。又、炉址の縁辺より凹石や縄文土器片が出土する。A・Bトレンチの10～13区の各遺構については、本日までに測量事務

を終了する。

Cトレンチ1~25区にわたる、全面清掃発掘が行われる。C、14区の集石墓址のあらいだしも行われたが、同所の黒土層より鶏卵大の礫が約150個排除される。礫は自然礫と割石が半々位であった。C、4区の一45cmの黒土層内より、石棒の欠損品1個と凹石1個が出土し、C、7区の一33cmより繩文土器片、打石斧1個の検出があった。午前10時頃、信大医学部の西沢寿晃氏が来訪する。昨日、集石造構上面より骨の出土が認められたので、その鑑定を依頼したものあり、本日、同氏によって件の骨の検出がなされ、精査のため持参される。午前11時頃より現場において墓址群出現に伴う慰靈祭が行われる。諏訪山梓川院小松安養寺の住職を依頼し、花のそえられた祭壇を前にしての読経の中、調査関係者一同、焼香と折りをささげて供養を行う。午前中、信濃毎日新聞社の浅川浩記者が取材に来訪する。午后に入り、波田町議会議長の百瀬喜八郎氏他、町議会関係者が多勢現地見学をなされ、調査によって明らかにされた、造構、遺物等について、理解を深められてゆく。

2月28日（木）曇、晴、山添いは小雪ちらつく曇天で、後、次第に晴天となる。

参加者 調査団、大久保、倉科。調査補助員、石渡、永井、田中（正）、白崎、宮城、上野山、大月（康）、田中（昭）、波多賀。作業協力者1名

遺跡現場における主なる発掘作業は、昨日、各トレンチ共造構の輪郭がほぼつかめたので、今日からは、造構の清掃や測量を重点に作業をすすめる。主なる事項は、下記の如くであった。

1号住居址の床面、柱穴、溝、炉址、周壁等の清掃が午前中行われ、午后に入り実測がなされて、その集録を済ませる。この1号住居址は、北側約半分が未掘部分にかかるが、その北壁の複雑なセクションも、夕方までには計測する。

Cトレンチの土壤、集石の両墓址については、清掃のできた造構より順次平版測量し、作業の整理を行ってゆく。又、集石址は上面の集石が除去された後、その下層への調査を行うつもりであったが、本日時点では、計測の済んだ集石の除去が行われたことにとどまり、明日に作業をもちこす。Cトレンチ内の不要黒土削去により、8~13区等にわたり、多数の小穴群が発見された。土壤墓址に伴う細かな柱穴とみられ、喪屋の施設があったのではないかと推測せしめる。

Cトレンチ西壁セクションの計測を行う。本日、1~6区までを済ませる。

2月29日（金）晴、終日おだやかな快晴で、春4月をおもわせる暖かな陽気となる。北アルプスの山脈が久しぶりに青空に映え、美くしい限りであった。

参加者 調査団 大久保、倉科。調査補助員、上野山、石渡、永井、田中（正）、白崎、宮城、田中（昭）、大月（康）、百瀬（光）、大月（敬）、百瀬（兼）、波多賀。作業協力者1名。

昨日でA・B両トレンチの発掘及び実測等の調査は完了し、今日はCトレンチ内の調査に全員が入る。主なる調査事項は次の如くである。トレンチの7~25区にわたる西壁セクションの計測を行い、これを済ませる。又、主として13~25区までの造構の継続調査を行ったが、昨日、作業終了間際に除去された、集石下の調べをなす。その結果明らかにされた、主なる事項をあげると、(1)、Cトレンチ15区の集石墓址の場合、上面すでに除去された石の下に、更に集石が続き、再び平板測量を行う。この集石の洗い出しの過程で、多数の鉄滓及び、ふいごの口の筒の

破片や、内耳土器片とみられるものなどの遺物検出をみると。又、遺構の中央下部には、浅鍋状に凹む鉄板状の敷物の上に、灰層、河原砂利層が意識的に敷かれており、民俗学的に珍らしい遺構が確認された。（2）、Cトレンチ16区の中央部には、ほぼ南北方向に長い方形状の落ち込みがあった。この落ち込み内の中央部分にも、 $70 \times 70\text{cm}$ 円形の厚さ1cmの灰層の分布があり、その下面には、 $35 \times 35\text{cm}$ 円形に分布する、厚さ約4cmの河原の砂利敷を認めた。更にこれを除去すると、暗褐色土の上面に、 $50 \times 50\text{cm}$ の方形状に、約1cmのロームを敷いて、固く叩きしめがなされているのを見える。この様に寝棺の下に灰を敷く風習は、つい最近まで地元衆の間には、行わっていたことが明らかとなる。この落ち込み内には、タガネの他、内耳土器片とみられるものが數片検出される。又、遺構内には、木炭化物やその粉末が全般的に散在したが、これらは墓の上面を保護した、喪屋の残存物ではないかと判断された。この様な、集石墓址の内部様相をつたえる遺構は、他にも認めることができた。（3）、Cトレンチ6区の西壁寄りには、西に未掘部分を残して、同区内に半月状にあらいだされた大きなピットが認められた。表土下50cmの、ローム面での明らかにされた穴の規模は、上面径が $80 \times 140\text{cm}$ （約140cm円形）であり、底部は意外に深く、ローム面下での数値は185cmを数える。然も穴は、ローム面下70~85cmのところから、円周を全体に拡大させていたが、単なる土壤ではないことを知らしめた。この遺構は、発掘終了日の今日までに完掘できなかったが、今回や従来の発掘においても他に類例がなく、中信平においても過去に前例のない遺構であるので、その全容を明確なものとすべく、近日中に精査の必要を感じさせた。ともあれ本日は、一応予定された遺跡の発掘調査を、無事終了させる。発掘期間中、降雨雪にあうことなく、その点寒さこそあれ、天候には恵まれた思いであった。午後5時頃現場において、大久保は団長の立場から、調査者一同に完掘に対する成果と礼辞を述べ解散となる。

3月2日（日）晴、陽の色は弱く、外気上昇みられず寒い1日となる。

波田町公民館において、葦原遺跡出土の、遺物の水洗い作業が終日行われる。参加者は、平林、塙原、田中（昭）、大月（康）、大月（敬）、大久保、波多腰、太田（憲）の以上8名であった。遺物は、各トレンチ各区分に分類し、遺物が混乱しない様整理した上で行う。

3月3日（月）晴、朝方は零下6度余となり、大地は凍結する。日中は若干陽気がゆるむ。

Cトレンチ6区で完掘できなかった、大きな土壤内の追加調査が行われる。参加者は、田中（昭）、塙原（敬）、大月（康）、波多腰、の以上4名。その結果、ローム面上下150cm前後のところより、大きな石や漆塗りとみられる残存物、骨粉などが認められたので、現場踏査願いたいとの依頼が大久保にあり、明朝現地入りすることとする。

3月4日（火）晴、曇。朝は零下数度、晴より次第に曇り、概して寒い陽気となる。

朝8時半頃より、大久保と波多腰はCトレンチ6区の土壤内の調査にかかる。精査の結果、この土壤の規模、形状、内部施設、様態などを確認することができた。中信地方では初めての、地下式墓壙として処理るべき、条件を具備してもいる。

3月8日（土）晴、昨夜雨あり、大地の凍結がとけて、暖かな1日となる。

波田町公民館において、「東筑摩郡波田町葦原遺跡発掘調査報告書」の、執筆分担打合せ会が開催される。出席者は、町教委関係者として、平林、太田（賢）、田中（昭）、大月（康）、百

瀬（光）、波多腰。調査員として、大久保、倉科、神沢、小林の以上10名となる。協議の上、それぞれの項目について、執筆担当者を決定する。依って、本日、担当の遺物や遺構実測図、執筆用材類などを関係者に渡す。

（大久保知巳）

### 第3節 草原遺跡の過去における発掘調査のあらまし

草原遺跡は、今回実施された緊急発掘調査以前において、すでに12回に及ぶ発掘調査がなされている。これらの発掘調査は、今回の緊急発掘調査とはその性格と目的を大きく異なるものであり、又、直接には関係をもっておらず、その第1回目から12回目に及ぶ遺跡発掘の、調査報告書刊行事務が、調査に従事された関係者の間で計画され、作業がすすめられているやにもきくので、ここに取扱うべきものではないかも知れないが、その後、諸種の事情変化もあり、遺跡の性格、内容、年代的位置づけ等々、関連する部分もあろうかと考えられるので、知れる範囲内において概要をまとめ、記してみたい。

過去12回に及ぶ調査は、いづれも松商学園高等学校当局者の発掘届出により、主として、日本考古学協会員の小松虔氏、松商学園高等学校教諭の市沢正大氏を発掘担当者として、実施されたものである。発掘の目的は、松商学園高等学校の地歴部を主とする、生徒の学習を目的とした、クラブ活動の野外調査であり、松本平西麓の縄文時代の遺跡を研究することに、主眼がおかれていた。又、調査後、遺構はそのまま埋立て、出土遺物は松商学園高等学校の資料室に保管し、展示して、見学者や研究者の利用に供する処理がなされて今日にいたっている。

本項における記述は、原則として調査年次順別によることとし、内容は、発掘した土地の所在地、地主氏名、調査年月日、調査結果として検出された、主なる遺構と遺物等にとどめ、発掘経過その他等については割愛する。尚、遺跡地の現況地図は、すべて普通畠地である。又、第1次・第2次発掘調査のみ、その調査結果を一括して取扱った。

1、第1次発掘調査、調査年月日、昭和39年3月10～15日。第2次発掘調査、調査年月日、昭和40年3月10～15日、以下、第1次、第2次発掘調査を併合して記述する。発掘した土地の所在地、草原1888番地。地主氏名、中村富男。調査結果の遺構と遺物、(1)、第1号敷石住居址、径3.4mの円形プランを示し、址内に約57cmの方形の石圓炉あり。伴出遺物は、縄文中期加曾利E式終末～縄文後期初頭の壠の内式、大安寺式各土器片、土偶胴部破片、石棒破損品、凹石、石鏃、磨製石斧、円形スクレイバー。(2)、第2号堅穴住居址、径、約5～6mの円形又至稍円形を示す。完掘はできず、周壁の1部、柱穴、1×1.2mの長方形の石圓炉址を確認する。伴出遺物は、加曾利E式土器。(3)焼土3箇所、内部より細片化した獸骨。磨製石斧出土。(4)、第3号敷石住居址、東西約5m、南北約6mの梢円プランを示す。炉は1辺が約55cmの方形の石圓炉であった。遺物としては、炉址の北80cmの敷石間に埋甕あり、口縁部を上にして偏平な石が蓋としてのせられていた。内部に無文コップ状小型土器あり、又、炉址より西2mに石棒の欠損品あり。縄文中期加曾利E式終末～縄文後期初頭大安寺式類似、他土器片が混在出土する。

(5)、焼土 2 箇所、自然石 3 個を含む。(6)、第 4 号敷石住居址、規模未確認。敷石間に年代差のある埋甕 2 個検出する。縄文後期初頭土器片が伴出する。(7)、縄文中期堅穴住居址の存在のみ確認する。この住居址は、第 4 号敷石住居址と重複していた。(8)、第 5 号堅穴住居址、1 辺 80cm、深さ 30cm の方形堅穴炉址あり、加曾利 E 式所属と判断される。(9)、遺物集計(前記遺物と重複するものあり)、主なものとして、加曾利 E 式終末期土器片、後期初頭大安寺式土器片。土偶、脚部 2 個、頭部 2 個、胴上半部 1 個。石器集計、スクレイバー・刀器 1、石棒欠損品 2、磨製石斧及び石匙各数個、石鍬及び凹石各 10 個前後、打製石斧 20 個

## 2、第 3 次発掘調査、調査年月日、昭和 41 年 3 月 10 ~ 15 日。調査内容不明。

3、第 4 次発掘調査、昭和 44 年 3 月 10 ~ 16 日、発掘場所、地主氏名不詳。調査概要、縄文中期住居址 5、縄文後期敷石住居址 1 が確認された。遺物は、加曾利 E 式の甕 3、土偶の脚部 1、同脚部 1、打製石斧 1、石鍬 1、石匙 1 が確認された。

4、第 5 次発掘調査、調査年月日、昭和 45 年 3 月 9 ~ 15 日、発掘した土地の所在地、葦原 1870 番地、地主氏名、高宮真理、調査結果の遺構と遺物、(1)、第 1 号堅穴住居址、縄文中期中葉所属であり、規模は南北 4.8m、東西 4.4m の円形に近いプランである。址内に径 1.3m を有する円形の堅穴炉(地床炉)あり、柱穴 4 箇所の他、周溝施設があって、その規模は巾 10 ~ 15cm、深さ 10 ~ 25cm でめぐる。址内より縄文中期中葉土器片と、石皿 1 個が伏せられた形で発見される。(2)、堅穴状ピットが南北に重複して検出される。規模は、径 1.25m × 1.05m、深さ ローム面より 1.2m であった。このピットの北側より、加曾利 E 式土器片、南側より縄文中期初頭形式及び勝板式各土器片が出土する。(3)、A トレンチ内に焼土 5 箇所確認する。A トレンチ<sup>1</sup> 区の褐色土層中に埋甕あり。A トレンチ 17 区より、縄文中期初頭土器片出土。B 及び D トレンチより、縄文後期土器片がそれぞれ出土する。(4)、主なる遺物集計(前記遺物と重複するものあり)、縄文中期加曾利 E 式甕 3 個、鉢 1 個、土偶脚部 3 個、石匙 2、打製石斧 13、凹石 15、磨製石斧 3 が検出された。

5、第 6 次発掘調査、調査年月日、昭和 46 年 3 月 4 ~ 9 日、発掘した土地の所在地、葦原 418 番地、地主氏名、茅野庄治、調査結果の遺構と遺物、(1)、第 1 号住居址、完掘できなかつたが炉址を確認、土偶が出土する。(2)、第 2 号住居址、完掘できず。(3)、第 3 号堅穴式住居址、径東西 5m、南北 4.5m の円形に近いプランを示す。1 辺が 1m 余の方形の石畳炉を有する。西壁近くに石蓋をした埋甕あり、加曾利 E 式の中葉土器相当である。柱穴 4 箇所確認。土偶脚部破片出土する。(4)、B トレンチの P 5 より、炭化したドングリの実出土。他に加曾利 E 式土器片出土。(5) B トレンチ 3 区に径 1.2m、ローム面よりの深さ 1.2m のピットあり、内部に遺物なく、底面近くに大小の石があった。又、焼土も確認されたが、後世の遺構らしい。

(6)、B トレンチ 6 区にも(5)とはほぼ同様のピットが検出される。内部より内耳土器が割れて発見され、獸骨の小片もあり、縄文時代とはちがった遺構らしい。(7)、主なる遺物集計(前記遺物と重複するものあり)、加曾利 E 式完形土器(第 3 号住居址の埋甕)、縄文中期中葉より同末に所属する、口縁から脚部にかけての土器 7 個体分、土偶の脚部 2、脚部 1、石匙 1、石鍬 6、石斧 2、石臼 1、凹石 2 が出土する。

6、第7次発掘調査、調査年月日、昭和47年3月6日～11日、発掘した土地の所在地、葦原1884番地、地主氏名、中村嵩、調査結果の遺構と遺物、(1)、第1号堅穴住居址、規模は東西5m、南北5.5mの円に近い角丸方形プラン。周溝、炉址あり、柱穴4箇所確認、加曾利E式終末期土器片、土偶6個出土する。(2)、第2号住居址、1部調査にとどまる。加曾利E式の中頃の土器片が出土する。(3)、第3号住居址、本遺跡で初めての土師時代後期の住居址が、地表下60cm面より検出された。東西4m、南北4mの角丸方形プラン、竈は石組で東壁のほぼ中央部に設置されていた。上層より加曾利E式期の土偶胸部1が出土。本址内より、土師器、須恵器灰釉陶器の各破片出土する。(4)、主なる遺物集計(前記遺物と重複するものあり)、縄文中期壺1、壺口頭部1、土器破片がダンボール箱(りんご箱)へ1箱分、凹石6、石匙3、石鐵1、磨製石斧1、打製石斧12、土偶7、土師期砥石1、轆部分1、土師器、須恵器、灰釉陶器各破片がダンボール箱(りんご箱)へ半分出土する。

7、第8次発掘調査、調査年月日、昭和48年3月9～14日、発掘した土地の所在地、葦原1872番地の2、1873番地、1870番地、地主氏名、振旗栄、高宮真理、調査結果の遺構と遺物、(1)、第1号平地住居址、南北に長い長方形の住居址で、平地式らしく炉址は検出できなかった。然し、柱穴4箇所確認でき、注口土器が出土したところから、縄文後期末に所属と考えられる。他に石匙1、搔器1が出土する。(2)、ピット3箇所に確認する。いづれも径0.7～1mで、P<sub>1</sub>は1m近い下部に縄文中期中頃の壺の底部が横倒しの状態で所在し、その下に自然石が散在する。P<sub>2</sub>・P<sub>3</sub>は、遺物出土が皆無であった。その他、柱穴状の穴としてP<sub>4</sub>～P<sub>9</sub>が確認されたが性格は不明。(3)、第2号堅穴住居址、北側の壁高約20cmの周壁が、半円状に発見されたが、1部のみで完掘はできなかった。縄文中期後半土器片が出土し、該期所属とみられる。(4)、主なる遺物集計、(前記遺物と重複するものあり)、縄文中期壺1、底部5、縄文後期注口土器1、打製石斧4、磨製石斧1、石鐵2、凹石5、磨石2、石匙1、搔器1。

8、第9次発掘調査、調査年月日、昭和49年3月4～11日、調査内容不明。

9、第10次発掘調査、調査年月日、昭和52年3月5～10日、発掘した土地の所在地、葦原1833番地、1889番地、地主氏名、百瀬孝夫、中村嵩、調査結果の遺構と遺物、(1)第1号住居址(内容不明)(2)、第2号住居址、1辺が約4m前後の方形に近い住居址である。炉址、柱穴3を検出。石皿、曾利2式土器が出土する。(3)、約2m巾の東西に長い溝状遺構あり、ローム面から柱穴状のピットも出る。(4)、第2号住居址の南に、径1m位の円形の集石があり、中世の墳墓ではないかと推定されるが、遺物も発見されず、性格は決定できなかった。(5)、第3号住居址、規模は不明である。焼土や柱穴2箇所検出する。曾利1式期土器出土し、該期所属とみられる。(6)、大きなピット4箇所あり、遺物は発見できなかった。(7)、主なる遺物集計(前記遺物と重複するものあり)、縄文中期曾利2式相当の壺1(埋壺使用)、縄文中期土器片、打製石斧2、凹石1、石皿1。

10、第11次発掘調査、調査年月日、昭和53年3月5～12日。発掘した土地の所在地、葦原1860番地の1。地主氏名、中野永子。調査結果の遺構と遺物、(1)、第1号住居址、完掘はできなかったが、埋壺と土偶の胸部検出される。(2)、第2号住居址、完掘できず。(3)、第

3号堅穴住居址、埋甕炉あり、阿玉台式土器出土する。初めての縄文中期初頭住居址で、完掘されたが残念にも、その遺構の内容は不明である。（4）、特殊ピット、規模はローム面上で東西の長さ1.9m、南北の巾1.5m、深さ表土下1.64m（ローム面までは-70cm）、底面の巾40～50mmの逆三角形状を呈し、北側の壁は斜面を、南側の壁は急な落ち込みとなっている。内部には、地表下65cmより土偶の頭部が、地表下97cmより土偶の胸部と凹石が、並んで発見される。（5）、主なる遺物集計（前記遺物と重複するものあり）、縄文中期壺2、鉢2、縄文中期阿玉台式、勝坂式、縄文後期掘の内式各土器片、土偶頭部1、胸部2、磨製石斧I、打製石斧3、石匙2、凹石2。

11、第12次発掘調査、調査年月日、昭和54年3月9～20日、調査結果の内、昭和54年4月6日夜、中信考古学会例会席上において、調査担当の小松虔氏より、縄文後期掘の内式期相当の土製スプーンが出土した旨の知らせあり（諏訪市や松本市牛の川遺跡にも出土例あり）、又、別の土壙内より、木炭化物と人骨の出土があった、との発表がなされる

（大久保知巳）

## 第2章 遺跡の環境

縄文時代の遺跡は、平地部におけるものより山麓線に立地するものの方が多いが、葦原遺跡を中心とする波田町の場合も、地籍そのものがその様な条件下にあるため、例外ではない。西に標高1387mの白山が頂点を示して、以西の山脈に続き、北は梓川が深い谷を刻んで、平地への開口部にあたっており、その縁辺に幾段もの河川段丘を平行させ、南は、西より東へ流下する唐沢が、隣接する山形村との境界線を記すかの如くであり、東は、西を高所として、唐沢と梓川に区切られた、広大な扇状地となって以東の松本平に続いており、この扇状台地や河川段丘上が舞台となって、年代差をもつ遺跡が数多く立地している。

波田地籍における今までに確認された遺跡の内、その上限を示すものとしては、先ず、縄文前期に相当するものがあげられる。その遺跡名と遺物内容は、巾下（字寺山）における、縄文前期初頭の神の木式土器については知見がないが、今回の葦原における調査によって、縄文前期初頭に位置づけられると思われる土器片が、唯1片ではあるが検出できたことは、大きな収穫のひとつであった。続いて下島と、麻神遺跡の前後2回に亘る調査で、微量ではあるが諸磯B・C土器片が得られており、更にこれに續く縄文前期終末期の、下島直後形式土器片が、葦原、麻神、それに隣接山形の唐沢と出土しており、山麓線における当時の集落のあり方が注目される。縄文中期相当遺跡は急増し、地域内における規模も拡大すると共に、その内容においても密度が濃くなる。中期初頭形式土器などを出土する遺跡としては、葦原の地、下原、中下原、麻神の諸遺跡があげられ、以下、編年による波田地区内の遺跡名を列挙すると、中期初頭形式に続く阿玉台式、あるいは藤内式土器などを出土する葦原、上野、麻神各遺跡が知られており、勝坂式土器を出土する葦原、下島、巾下、古城、波多、麻神があり、縄文中期後半の加曾利E式期に入っては、葦原、上野、下島、巾下、古城、麻神の諸遺跡を数へ隆盛期を記す。又、以上その他、分布調査によって、縄文中期所屬土器片を出土する、と登録された遺跡としては、平林、古城、堀之内、上海渡、見付久保があげられる。縄文後期土器片を出土する遺跡としては、麻神、葦原の他になく、縄文晩期土器片を出土する遺跡としては、上海渡、麻神があるものの、その遺跡数は激減し、遺物などの包含も稀薄となる。又、縄文期の石鏃、製石斧等の石器のみを出土する遺跡としては、タイキ林、寺山、鳴音原がある。弥生期に入ると、下原、平林、巾下、古城、麻神の各遺跡が所在し、歴史時代に下降して、土師器、須恵器、灰釉陶器等の各破片を出土する遺跡としては、下島、下原、平林、中下原、北浦、巾下、上海渡、寺山、見付久保、元寺場（若沢寺址）、葦原等があげられ、開拓初源における集落の所在を示す。

波田町に広がる扇状地は、長年月にわたる山寄りよりの土砂の流入堆積により、その層を厚くしており、かつての造構や遺物が、表土下1mを下降する深部より発見される事例が多く、遺物表探等による、表面的な遺跡分布調査では、なかなかその実態を把握し得ない感がある。おそらく、かかる諸条件が、波田町における縄文早期以前の、古い時代にさかのぼる遺跡を、深く埋蔵させているのではないかとも想像させる。今後、諸開発に伴う造構、遺物の発見など、多分に可能性を秘めてもいるので、少くからず関心を寄せたい思いでもある。

（大久保知巳）

第1図 波田町遭跡分布地図

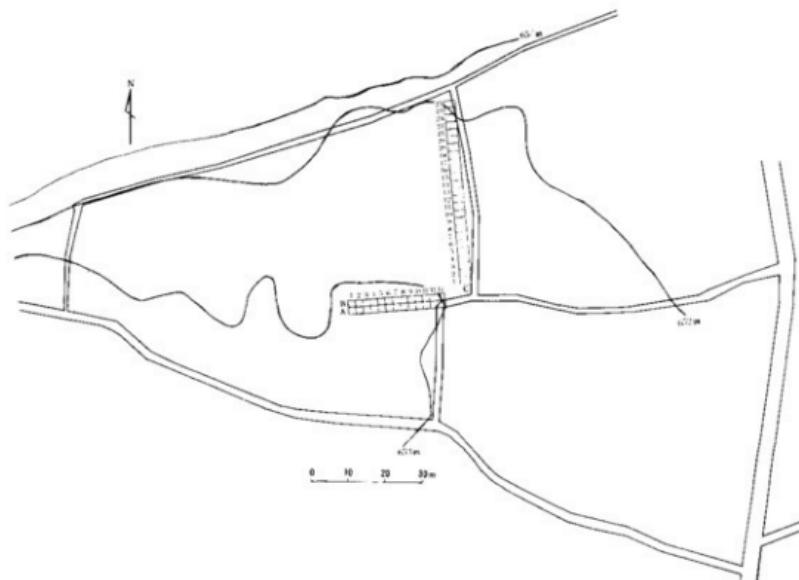


## 第3章 調査結果

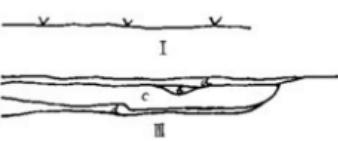
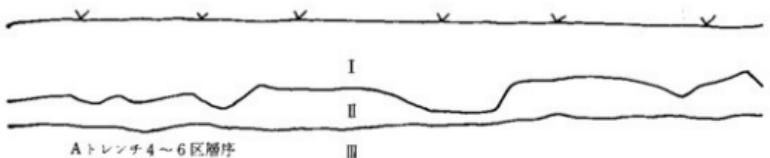
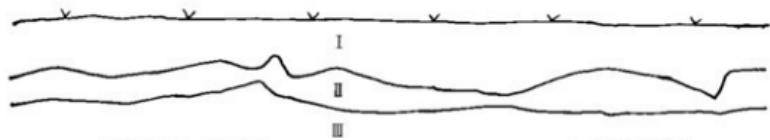
### 第1節 トレンチの概要

この度実施された、葦原遺跡の緊急発掘調査は、遺跡内をT字形に敷設される町道建設のために、やむなく事前調査となったものである。さしつけた工事日程、総工事費等のからみもあり、調査はあくまで予定路線内にとどめることとし、然も、過去12回にわたる松商学園高校の手による、同遺跡の既掘部分を除外してのトレンチ設定となる。従って、限定された枠内における調査を余儀なくされ、遺物の表探、予備調査等からして、当初は多分に報告書の内容に稀薄さを懸念されるむきもあった。

遺跡は、北側にかつて西南より北東へ流下した梓川の、自然浸蝕による深い第二河岸段丘線があり、段丘上と低所との比高差は約12mで、いわば葦原遺跡はその沿線の段丘上に立地している。又、段丘線とほぼ同方向に、遺跡面上を西南部を高所とし、北東部を低所とする、ゆるやかな勾配があり、現況地目は全面畠地となっている。

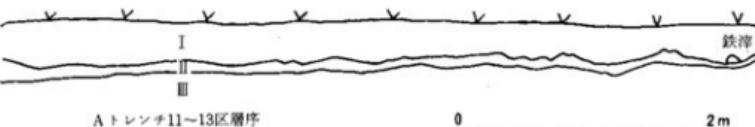
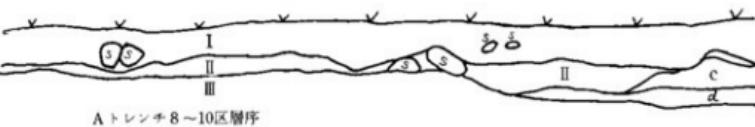


第2図 葦原遺跡全体図

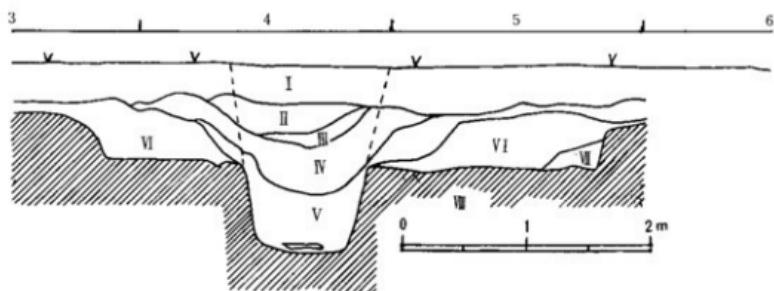
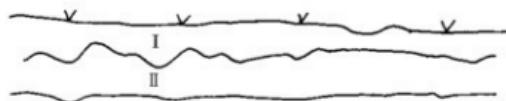
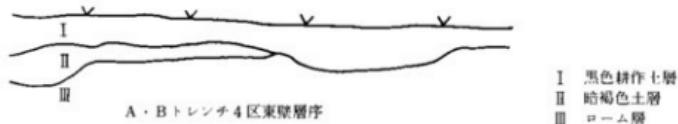


- a. はり床、非常に固く、附近の土色とは相異する。小石を含まない。粘土質の土が使用される。
- b. 黒褐色土、レンズ状に単一に入る。
- c. 褐色土、粒子が細かく、小石を含まない。粘性弱く、耕作土より堅い。散発的に遺物が出土する。
- d. 黄褐色土、粘性あり、散発的に遺物出土する。

A Trench 7 layers (near No. 2 residence)



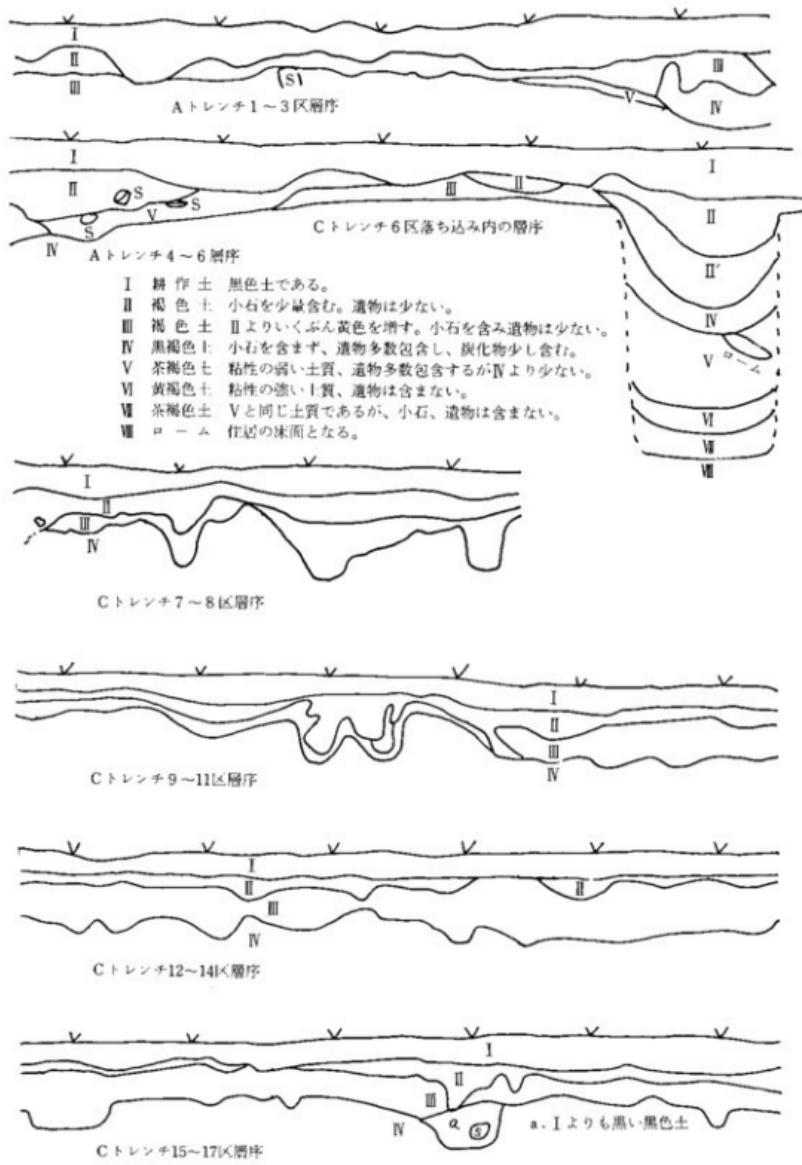
第3図 Aトレンチ標準層序



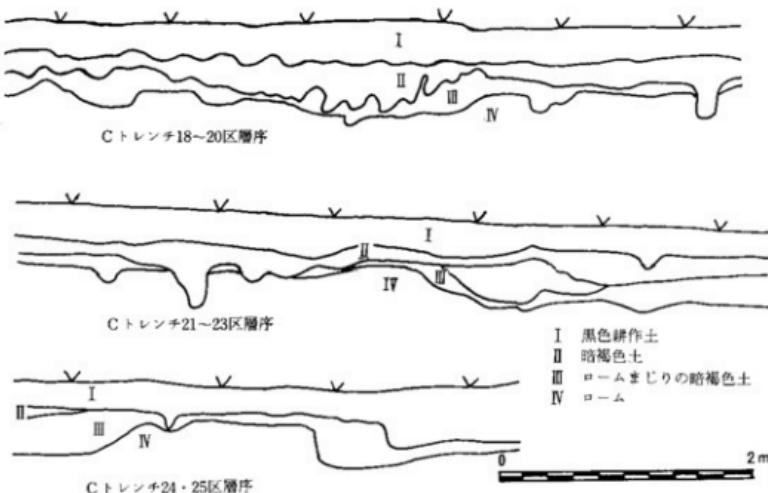
- I 黒色耕作土
- II 黒色土、小石少なく、Iよりも黒く粒がこまかい。
- II' 黒色土、IIよりかたくしまっており、ロームを少し含む。
- III 黒色土とロームの混合、ロームは塊で量は少ない。
- IV ローム塊をIIIよりも多く含み、やわらかい。
- V 暗褐色土、やわらかく、小石はない。
- VI ロームをIIIよりも少く含み、やわらかい。
- VII 黒色土であるが、やわらかく、小石もない。
- VIII ローム

第5図 B トレンチ 3～5区(第1号住居址付近)北壁層序

トレンチは、東西方向に伸びる予定路線が4m巾であるところから、第2図にみられる如く、これを2m巾に分割して、南側をAトレンチ、北側をBトレンチと命名し、更にトレンチの長さ26mを2m間隔に区切って、西側を基点とし1区、2区と東に向けて13区まで設定する。又、一方、このA、Bトレンチ線に直角に交わるT字形の、北方へ伸びる路巾は3mであり、長さ50mを2m間隔に区切って、南より1区、2区～25区とした。従ってCトレンチの各区は $3 \times 2$ mの長方形区画となる。



第6図 C トレンチ 1～17 区層序



第7図 Cトレンチ18~25区層序

A、Bトレンチは、Aトレンチ南側壁のセクションにより、多少の変化はあろうけれど、ほぼその全体の層序をうかがい知ることが可能かと思われる。それによれば、第1層の黒色耕土は、1区より7区にかけては37~74cmを記録し、部分的に深い溝状の落ち込みをみせるが、これは畑作地帯での草勞、長芋、大長人參等、根菜類の栽培収穫によるためと、縄文中期堅穴住居址等、遺構がかつて設営されたためによるものであろう。8区から13区にかけては、第1層が20~38cmとその厚さをうすくし、縄文期における遺構がみられなくなると共に、遺物検出も微量となる。第2層は、第1層黒色耕土と、第3層ローム層との混合層で、いわゆる暗褐色土を呈する地層である。1区より6区までは10~35cmを記録し、第1層との区切り線に変動がみられ、第3層との区切り線は、平坦に近い状態を示す。第3層はローム層で無遺物層となるが、そのローム上面は西寄りの1区で表土下68cmで達し、東へ向うに従って徐々にその深さを増し、6区では-91cmとなる。この第1層及び第2層に縄文中期前半の遺物が多量に含まれると共に、A、Bトレンチの3~5区にわたり、第1号堅穴住居址が検出される。Aトレンチ7区の南壁寄りに、未掘部分にひろがる縄文中期の、第2号住居址が半月状に発見される。第1層の表土下約41cm面に、粘質のある土を使い、はり床によって設営されたものである。又、第2号住居址の下層には、A、Bトレンチの7~9区にかけて、表土下約70cm面に縄文中期の第3号住居址の竪穴が検出され、土器、石器、炭化物などの遺物出土を認める。上層覆土は多少の複雑さをもたらす。9区の東側より13区にかけては、第1層が20~38cmとその堆積土を減じ、第2層は更にうすく、第3層のローム面上に平坦に近く、約10cm程度介在するにすぎない。然し意外にも、この1、2層の浅い層間

から、11~13区にかけて、中世所属の土壙墓址2箇所、集石墓址3箇所などが検出される。これに伴う遺物は、内耳土器片、石皿、鉄滓、古錢等であった。

Cトレンチは、1区より25区にかけて、その西壁の断面セクションがとられた。第5、6図に示す如くであるが、その中で比較的安定した順序を示している場所は、1区、2区、9区、11~15区、17区であった。然し、その他の場所の様相は非常に変化に富み、複雑多岐を極める。これは同所に、かつて土壙墓あるいは集石墓が、繰り返し設営されたための擾乱によるものと、畑作地帯での、根菜類栽培による畠地耕作によるものであろう。いちいち説明の要も感じないので、セクション図の掲出にとどめたい。然しこのCトレンチ内は、発掘調査する以前、全く予想もしなかった中世所属とみられる墓址群が、密集状態で検出され異彩を放つ。しかもその殆んどが、表土下20~60cm程度の、非常に浅い黒色耕作土から暗褐色土にわたって所在しており、ややもすれば見落しがちの、この層における遺構の検出に、慎重さや技術面で新たな問題を提起するかの如くでもある。

Cトレンチ内に検出された主なる遺構としては、何といっても6区の西壁寄りに所在した、地下式墓壙であろう。フラスコを伏せた様な、この種形態の地下式墓壙は、松本平においては初めての検出事例である。又、中世所属とみられる集石墓址が10基、土壙墓址が21基数えられると共に、これらの墓址に附属するであろう、表屋の柱穴とみられる小穴が数多く発見されている。その他、Cトレンチの3~4区にかけて、東西方向に伸びを示す、溝状遺構も1箇所確認される。

Cトレンチ内の主なる出土遺物は、墓址遺構に伴出したものとして、鉄滓、内耳土器片、タガネ、鉄釘があげられ、その他、微量の甕文土器片、石棒欠損品、凹石、打製石斧等があげられる。

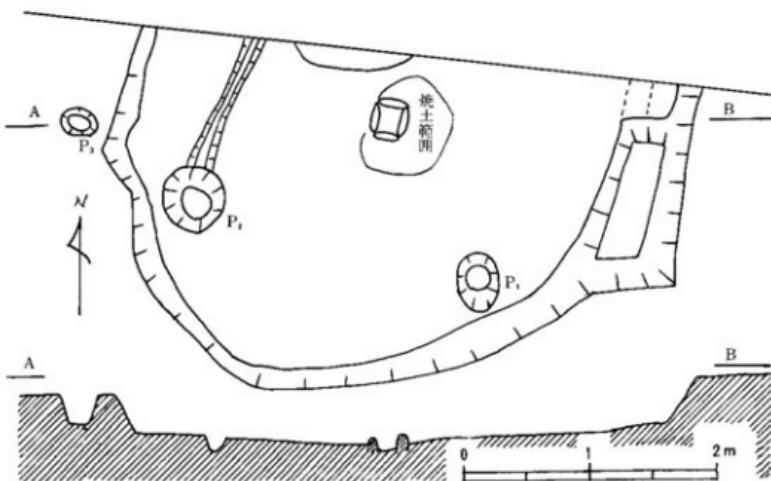
(大久保知巳)

## 第2章 繩文、遺構と遺物

### 1、第1号住居址と遺物

#### 第1号住居址（第8図）

第1号住居址は、Bトレンチの3、4区を中心とし、Aトレンチ3、4区及びBトレンチ北壁の末掘部分に亘っていた。結果的に明らかにされた遺構は、本址の南側約半分であり、北側約半分は末掘部分に埋蔵されたままとなる。この1号住居址検出過程で注意された事項は、発掘当初よりその上層覆土中に、土器、石器類の濃密な包含が認められたことである。ことにBトレンチ4区は、遺物出土が顕著であった。土器は勝坂系類似のものが多を極める。発掘2日目にいたり、これらの土器だまりは、住居址直上遺物であることがわかり、早くも本址を第1号住居址と命名する。遺物もいわゆる勝坂式より下層に及ぶに従って、個体のまとまった藤内式土器の検出がなされはじめめる。又、打製石斧、石鎌、磨石等の石器を含むこれらの遺物類は、本址の炉址を中心とする床面や、その直上に集中しており、中心からはずれた南壁寄りの址内には、 $22 \times 15 \times 7.2\text{cm}$ 程度の石3個、 $48 \times 16 \times 15\text{cm}$ 程度の細長い石2個、 $65 \times 26 \times 25\text{cm}$ の石棒状の石1個等が、約150cm円形の範囲内に横倒しの状態で発見されたが、明確な遺構を形成するものではなかった。然し、



第8図 第1号住居址

本址と何等かの意味あいをもつ石ではある。表土下約83cmの下層にいたり床面が検出でき、つづいて周壁、炉址、柱穴のあらいだしがなされる。以上の如き住居址内の遺物包含状態を示し、1号住居址の発掘部分が明らかにされる。

住居址は、未掘部分があるため、その全容を知ることはできないが、円形プランをとるものとみられ、炉址をよぎる中軸線上の上面径は、東西方向の数値から約410cm、下面径は約380cm円形の規模となる見込みである。炉址は、址内のほぼ中央部に位置する小形の石壠<sup>レ</sup>で、25×8×15cm程度の石4個を方形に組合わせてつくられており、その外径は、東西及び南北方向共1辺が34cmを記し、内径は上部で東西26cm、南北28cm、下部で東西18cm、南北22cmを示していた。炉址内には、上層部に焼土を若干含む灰層が、2.5~4.7cmの波のある堆積を示し、その下部には赤褐色の焼土が2.8~5cmのやはり凹凸のある堆積をなして、地山のロームに続いていた。炉址内よりの出土遺物は認められなかった。又、この炉址に接する東側に焼土が分布したが、その範囲は東西約70cm、南北約85cmで、堆積は2~3cm程度であった。周壁は、西壁が約32cm、南壁が約46.5cm、東壁が約56cmと、西壁より東壁にめぐるに従い、その深さを増していた。尚、東壁部が棚状となり、ローム上面と住居址床面との間に、階段状の構えを残したが、これは発掘調査時における掘りすぎのためである。柱穴として確認できたものは、都合3件であった。この中に址内に所在するものとして、P<sub>1</sub>、P<sub>2</sub>があげられ、址外のものとしてP<sub>3</sub>が含まれる。P<sub>1</sub>は、址内の南東部に位置し、その上面径は、東西35×南北47cm、下面径は、東西20×南北20cmで、深さは67cmと深くP<sub>2</sub>は南西部に位置し、その上面径は、東西50×南北55cm、下面径は、東西24×南北25cmとなり、深さは53cmを数える。P<sub>3</sub>は西壁上に接してつくられ、上面径は東西30×南北22cm、下面径は東

西 20×南北 12cm、深さ 23cm を記録する。P<sub>1</sub> 内より黒曜石のフレイク出土があった他、柱穴内よりの出土遺物は認められなかった。又、P<sub>2</sub> に通ずる溝状の遺構が、未掘部分の北側より、址内床面上に刻まれていた。恰度、周溝を想像させる形態のものであり、溝の上巾が 10~20cm、下巾が 4~8cm、深さは約 14cm 程で、確認できた長さは 113cm であった。柱穴へおち込むこの溝が何を意味するものであるか、適格につかみ難い。床面は平滑で固い仕上げがなされていたが、全体的には炉址を中心に、若干の凹みがつけられた感じでもあった。本址は床面及びその直上より検出された遺物により藤内 I 式期に相当する住居址かと推測される。ことに、炉址は石囲炉であったものの、その規模は小さく、申し訳程度の構築であり、温暖気候時における縄文前期時代の、様態を残すものとして理解された。

(大久保知巳)

#### 第 1 号住居址の出土遺物（第 9~14 図）

前項、1 号住居址で記述の如く、本址に包含され検出された遺物は、その床面や直上に、土器だまり的な型態をもって埋蔵されていた。従って遺物は集中的な感があったが、中でも土器が圧倒的な数量を示し、石器の出土は少くなかった。又、土器の中での全体的な観察結果では、第 1 層耕作土の中でも、比較的上層にあたる表土下 30cm 代では、縄文中期後期の土器片が目立ち、第 2 層、第 3 層に及ぶに従って、縄文中期前半に所在する土器類が主体をしめる。これらの土器類は多彩を極め、又、それぞれの所属年代も時間差をもち、かなりの巾が知れ、都合 15 分類が可能となる。量的な面では、第 5 類土器とした藤内 I 式相当土器が他を圧倒していた。完形土器は皆無で破片ばかりであったが、比較的個体がまとまって、図上復元が可能となった土器も 1 体分ある。以下、遺物を土器と石器に大別し、1 速番号を付し、更に分類、整理して報告にかえたい。

##### (1) 土器（第 9 図~13 図）

###### 第 1 類土器（第 9 図 1）

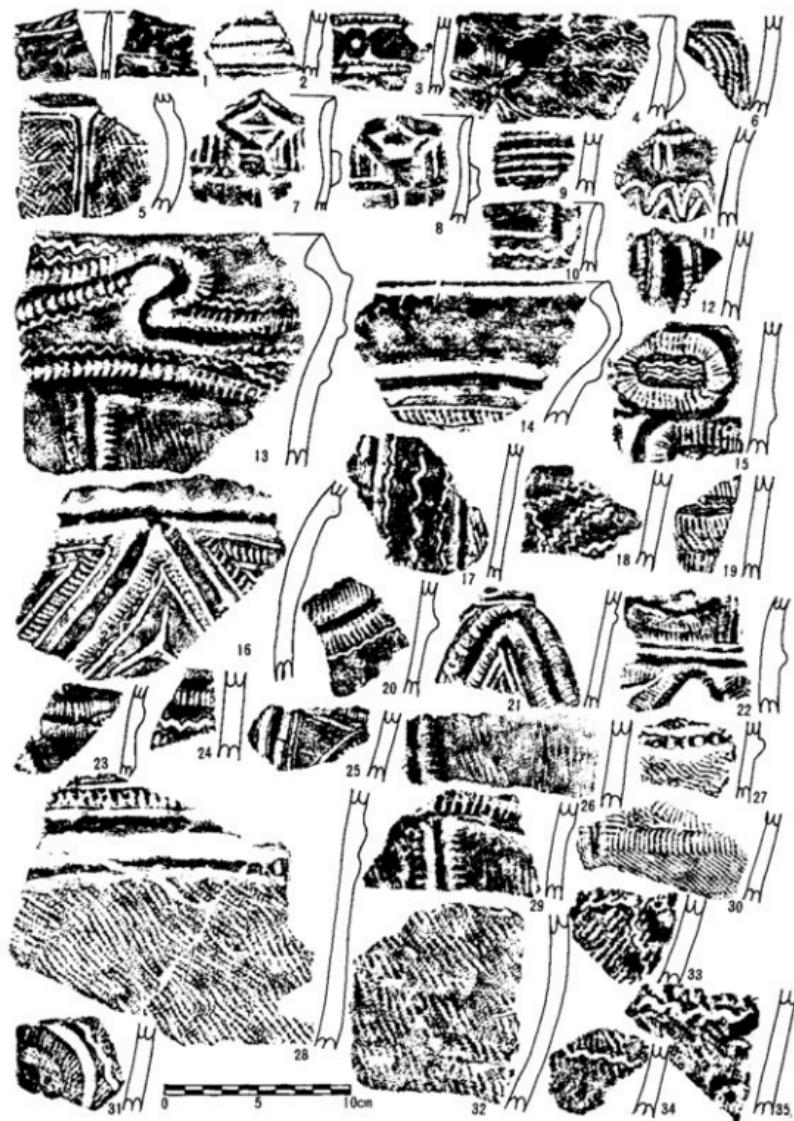
本類に含まれるのは第 9 図の 1 の 1 例のみである。A トレンチ 3 区の、-45cm の 1 号住居址上面覆土より出土したものである。器厚は 0.4cm、胎土、焼成よく、黄褐色を呈する波状口縁部である。施文は、小破片のため多くうかがえないが、外器面に方向の異なる横走する細い条線が引かれ、内面にも口縁に沿って、細い条線が 1 本横走し、その線上の口唇部にかけて、浅い斜めの爪形文を連続させている。縄文前期でも早い時期に相当する、関西系土器片とみられる。

###### 第 2 類土器（第 9 図 2）

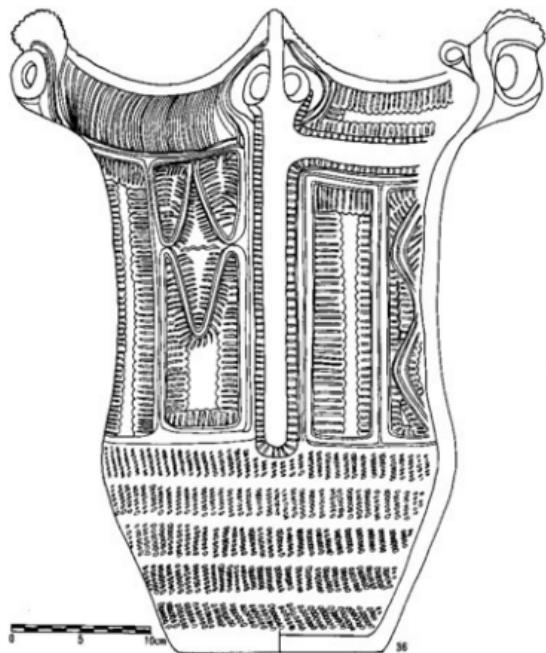
本類も 2 の 1 例のみである。1 号住居址の中央部床面直上より出土したもので、器厚 0.7cm、焼成のよい赤褐色の脚部破片である。横走する細い粘土紐を幾段にも貼りし、その上面に密な結節状浮線文を付している。縄文前末期に近い、諸磯 C 式平行土器片であろう。

###### 第 3 類土器（第 9 図 3~5）

3~5 を含めた。それぞれ施文面を異にするが、3 は 1 号住居址出土遺物の No.10 とされたもので、器厚 0.5cm、赤褐色で、口縁に近い部分の破片である。施文は、沈線や僅かな陰刻手法により、横位の長楕円×円形×長楕円の連接文と、その縁どりに連続刺突文などを加えて、施文効果をあげている。梨久保式の特徴を示した施文を残している。4 は、1 号住居址上面の -45cm 出土



第9図 第1号住居址出土土器(1:3)



第10図 第1号住居址出土土器(1:4)

で、器厚は0.9cm、黒褐色系をとる平縁口縁部である。器全面に繩文が転載され、その地文の上に口縁に沿い、平行する波状沈線文が引かれるが、外器面に隆起の加飾がある。5は、1号住居址遺物のNo.1として検出されたもののひとつである。器厚1cm、胎土、焼成共によく内側する口縁部である。平行沈線と浮隆線による方形区画がとられ、その内部に羽状繩文が施される。

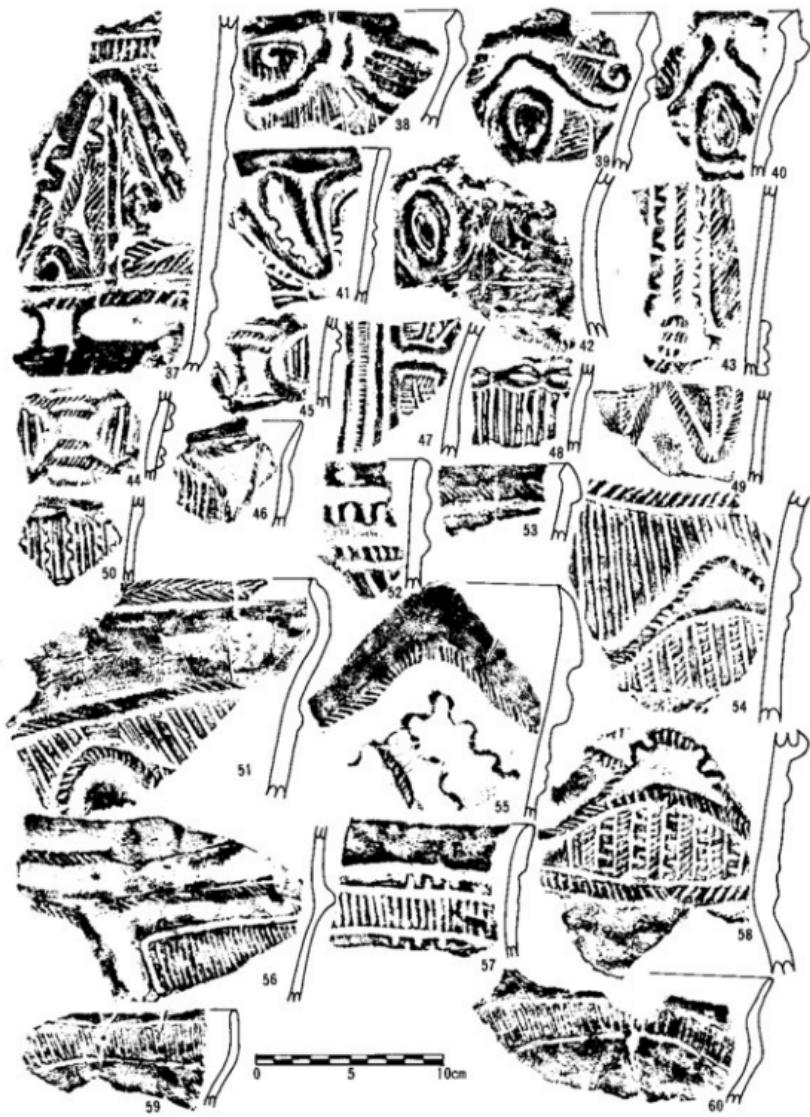
#### 第4類土器(第9図6~12)

本類は、洛式に対比されるものをまとめた。器面に連続押引文が密接して施されるのが特徴とするが、後出する藤内期の押引状爪形文とは、全くその趣きを異にしている。総じて黒褐色系をとるが、赤褐色を呈するものもある。6、9は共に器厚0.7cmで、連続押引文が密接し、7、8は、器厚0.5cmでやや手となる、小形土器の波状口縁部である。波頂部に枯土紐による菱形区画をとり下部結束し、口縁部に横帯区画をもうけて、その内部に連続押引文を充填している。10は、平縁口縁部で、直線状あるいは波線状に、連続押引文を横走させている。11は、器厚0.9cm、胎土に砂粒を含む胴部破片で、連続押引文の下に、大きなうすい波状沈線を描いている。12は、赤褐色となる胴部で、隆線を軸にその沿線に平行し、連続押引文を付している。

#### 第5類土器(第9図13~35・第10図36)

本類は、1号住居址の床面直上、あるいは覆土より出土した土器類であり、土器類中、本類に

含まれるもののが最も多いので、他を圧倒し、1号住居址を位置づける、主体的な資料でもあると云うことができる。総じて器厚は、厚いところで1cm前後、うすいところで0.7cm前後を示すものが多く、胎土、焼成共によく、赤褐色系をとるが、部分的に黒褐色となるところもある。器壁は概して調整のよい仕上げとなっている。本類の代表例は、図上復元が可能となった唯1の資料、第10図36をあげることができる。36は、高さ46cm、口径30cm、底部径14cm、器厚1~1.2cmの数値を記録する。器は底部より腰のはり出し部まで外傾して開き、これに続く胴部は直立て円筒状をなし、口縁部にいたって、急に開口の度を増しながら、しかも内擣する形を成している。胎土、壁面調整、焼成共によく、赤褐色系をとる。口縁は、波頂部4点を数えるゆるやかな波状口縁となり、波頂部には、それぞれ把手が付けられるが、側面よりみると、獸面を感じさせる造作である。又、外器面ばかりではなく、口唇内側にも円形の突起物の加飾がある。施文は、口縁部に隆線あるいは浮隆線による、横位区画帯があり、内部に縦方向の整った沈線を連続して引き並べたり、区画線に沿って、大形の押引状爪形文を連続させ、その縁どり線に、半截竹管を横に連続押捺して、文様仕上げの格調を高める波状線を残している。胴部には連続爪形文を付す隆線や、浮隆線による縦長の方形区画を8面とり、更に1部の区画には、三角状及び至は菱形に区画をとったり、蛇行線を入れて変化ある区画をとり、その内部に大形の押引状爪形文を充填し、縁どりに波状線を入れて、まとめをよくしている。腰部から底部にかけては、僅かに断続する繩文が、帯状に何段にも施されて、器を埋めつくしている。13~25は、口縁部から胴上半部に位置する部分の破片であり、本類の特徴的な施文を残している。総じていえることは、いづれも壁面調整がよく、胎土、焼成をよくし、明るい赤褐色を呈している。又、器厚は0.8~1cmとなり、厚手を示している。13、14、16は、共に丈形破片で、遺物番号版2として検出されたものであるが、それぞれ個体を別にしている。13、14は共に平縁の口縁部で、頸部から外反して開口し、口縁にいたり内擣する器形を成している。13は口縁部に巾広い横帯区画をとり、内部に高低差をもつ隆線をN字状に走らせ、隆線沿いに右手による丈形の押引状爪形文を連続させ、更に波状沈線文を自在に駆使して、施文効果をあげている。頸部以下には、隆線垂下による区画がとられるらしく、押引状爪形文や、うすい痕跡的な繩文の転載がある。14は、口縁部に無文帯をおき、隆帶を1条横走させた後、平行沈線をめぐらし、その平行沈線間は、左ききの櫛齒状押引文を連続させている。16は、頸部破片で、隆帶と共に平行する沈線により、三角及至は菱形の区画がとられ、内部に左ききの櫛齒状押引文を連続させ、無文部に大きな三叉状文を残している。17、18は波状沈線を何条も同方向に垂下させたり、曲、直線状に入り組ませて、自在な施文を残す。17には縦方向の微隆線が伴ない区画をとるらしい。15、19~25は胴部破片で、隆線による梢円状あるいは三角状の区画があり、内部に右ききの押引状爪形文が充填される。又、僅かな空間に波状沈線をたくみに入れている。21~23、25の爪形文は、非常に緻密で密な施文となっており、いづれも整った構図と文様を残している。20の爪形文は、隆線を境にして、左ききと右ききの両施文がうかがえる。26~35は、本類の胴下半部をしめるもので、31、35は版10として、又、32~34は版1として遺物検出されたものである。黄褐色を呈し、まばらな爪形文と、波状沈線による区切りがあり、以下、中位の繩文を全面に施している。31は緻密な繩文が地文となり、整った回帯同



第11図 第1号住居址出土土器(1:3)

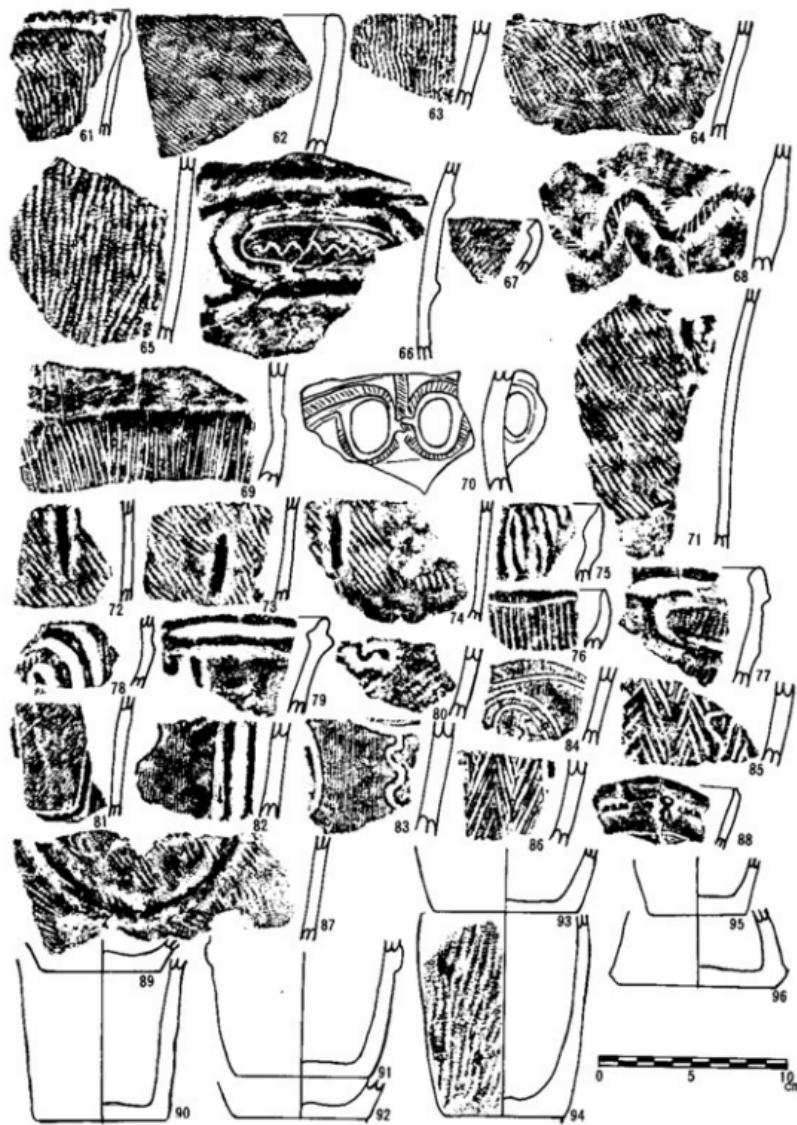
心円文を残す。28は<sup>伝</sup>2、26は<sup>伝</sup>4の遺物番号をもつ大形破片で、29、30と共に、いづれも隆線沿いに大形の押引状爪形文が連続し、縄文が下脣部に全面施文される類である。この中、26、29は13と個体を同じくするとみられるものである。30の爪形文は、より整然としており、脣部の縄文も微細な節と条をもつ、洗練された施文で美麗を極める。27は、隆線の両沿にこまかな爪形文をもち、30と同様、縄文も細くなり、隆線上を押圧して、連鎖状の趣を出している。

#### 第6類土器（第11図37～50）

本類は37～50が所属する。藤内2式相当土器をまとめたもので、1号住居址の-40～-50cm前後の覆土中より検出された。器厚は0.5cmを示すものが圧倒的に多いが、0.8～1cm程度の厚手となるものも僅か含まれる。胎土、焼成共によく、赤褐色乃至は部分的に黒褐色を示している。38は平縁口縁部で、隆線による半円形区画をとり、39は波状口縁、40、42は平縁口縁部を形成して、隆線による半円形、及び梢円状の区画をとり、その内部を沈線あるいは刺突による波状文を施している。この隆線による梢円区画文は、かなり特徴的である。37は<sup>伝</sup>14として検出されたもので、底部より脣上部にわたる破片である。底部近くに、無文の横位長梢円区画帯を残し、脣部にかけて縱長の三角区画帯をめぐらしており、区画内に三叉文、連続爪形文を充たしている。41は、壁面調整のよい平縁の口縁部で、長梢円区画をとり、三叉文や刺突による波状文を残し、隆線上に爪形文を施している。43は、<sup>伝</sup>4の遺物番号をもつ脣部破片で、爪形文を付す継の隆線区画があり、区画内に連続爪形文を密に施し、刺突による波状文を描出する。44、45は、口縁に近い破片で、横位長梢円区画と区画を連結する、刻目のある粘土紐が、上下2重につけられ、区画内を沈線で充填している。50は、区画内を沈線と刺突による波状文を残しており、48は口縁に近い破片とみられるが、横走する粘土紐を指頭で押圧し、その中央部に横位の刻目をひとつづつ付して連鎖状とし、区画内に継の沈線をみたしている。49は底部に近い破片で、刻目をもつ粘土紐を山形に大きく上下させ、三角状の区画をとり、内部に細かな連続爪形文を1条垂下させている。46は波状口縁部で、刻目のある隆線により、梢円、三角等の区画をとり、内部をかるい押引状の沈線でうづめる。47は脣部破片で、巾広の浮隆線による縱形の方形区画をとり、内部を爪形文でみたす。

#### 第7類土器（第11図51～60）

第7類としては51～60が含まれる。器厚は0.8cmあるいは0.5cmを示すものが殆んどである。焼成よく、黄褐色乃至は、黒褐色をとる。54、58は脣部、51～53は平縁の口縁部で、胎土に微量の輝雲母含んでいる。51、54、58は、爪形文を付す隆線が脣部に直・曲線を描き、櫛形状や三角形の大きな区画をとり、内部に斜沈線を施し、その斜沈線間に刻目を入れて、変化をもたせている。58の脣部は無文部に続く。又、51は<sup>伝</sup>1として検出された遺物であり、口縁が内擣して無文帯となり、口唇部に綾杉の爪形文を1条横走させている。52は、太巾の隆線上を刺突し、波状文を描出したり、隆線上に爪形文を付し区画をとり、内部に斜沈線を施す。53は、口唇直下の肉厚部に連続爪形文を横走させている。55は、黄褐色で非常に壁面調整をよくする波状口縁部である。波頂部は山形をつくり、肥厚させた口縁に平行して、連続爪形文がつけられる。又、太目の粘土紐が口縁部に集まり、その上面に刻みを入れたり、押圧して波形に変化をもたせている。57は、<sup>伝</sup>1



第12図 第1号住居址出土土器(1:3)

10として遺物処理されたもので、平縁の無文帯の口縁部を若干肥厚させ、その下部に平行沈線区画の横帯があり、内部に縦沈線を施す。又、かるい千鳥状の刺突で波状文をつけ、直径 0.5cm の穿孔が頭部に 1 個所ある。56 は 55 とあるいは同 1 個体かと思われるが、調整のよい頸部破片で連続爪形文を付す隆帯によって区画がつくられ、内部に縦沈線を残す。59、60 は同類とみられ、64 として遺物検出されたものである。波状口縁部で、内彎する口縁部に横位の沈線区画帯があり、縦沈線を内部に残す。本類は、井戸尻 1 式に比定されるものであろう。

#### 第8類土器（第12図61～70）

本類は、いわゆる勝坂期に所属するであろうものをまとめた。61～70 が含まれるが、-50cm 以下で、1 号住居址の床面上覆土中の出土である。器厚は 0.6cm、あるいは 0.8cm 位のものが多く、赤褐色乃至黄褐色系をとる。61 は、610 の遺物検出である。器厚 0.4cm とうすく、胎土に多量の輝雲母を含む。口縁に近い破片で、横位平行沈線内の上下を、千鳥状に刺突し変化をもたせ、以下、全面に縄文を施す。62 は平縁の口縁部で、口唇に約 1cm の面とがあり、整った微細な節と条をもつ縄文を、器に全面施文している。67 も平縁口縁部で、口唇が尖り、整った細かな縄文を施す。63～65 は共に胸部破片で、縄文の全面施文となるが、63 はその圧痕が深く、1 見沈線の如くであり、65 は遺物 610 で、中位の縄文となる。66 は、胎土に輝雲母を含む口頸部破片で、隆線による長椭円区画内に、更に沈線区画があり、内に沈線波状文が 1 条横走している。68 は底部近くの部分で、連続爪形文をもつ巾広の隆帯が、大きな波状を呈して器をめぐる。69 は底部上の張出部に区画をとり、縦沈線の施文を残す。70 は獸面把手で、縁どりの隆線上に、連続爪形文が施される。

#### 第9類土器（第12図71～74）

71～74 が含まれ、いづれも №9 の遺物検出番号をもつ。器厚は 0.5cm とうすく、焼成はよく赤褐色となる。74 が底部に近い他は胸部破片で、施文は、整った 1.5cm 巾の縄文の転載を、横位帯状に幾段にも重ねて、器の全面を埋め、ところどころ縦長の長さ約 4cm、巾 0.5cm の棒線状突起の加飾がある。これら特徴的な棒線状突起をもつ土器は、松本市笠賀牛の川遺跡の、中期前半土器の中にも含まれており、類例は少くないが、本遺跡の場合も他の伴出遺物から、縄文中期前半に所属するものとしてよいであろう。

#### 第10類土器（第12図75～80）

75～80 が該当する。これらはいづれも B トレンチの 3、4 区の 0 ～ -34cm 間の上層出土である。器厚は約 0.7cm の中厚手で、胎土、焼成は概してよく、黄褐色となる。75 は輝雲母を少量含有する平縁の口縁部で、内彎し、内側壁を厚くしている。外器面には細い粘土糰を縦に密に貼布しており、1 見平行沈線的な感じを与える。76 は平縁口縁部で、沈線を縦に施文しており、その構図は 75 と同じである。77 も平縁口縁部で、隆線による椭円区画があり、内部に縄文を施す。78 は口縁に近い部分で、凹線によって形成される渦巻状微隆帯の上面に、縄文が転載される。79 は平縁口縁部で、複合口縁状となり、隆線が垂下するが無文となる。80 は胸部破片で、縄文地文の上に波状粘土糰の貼布が僅かに残る。縄文中期後半の曾利 I 式に相当する土器片とみられる。

#### 第11類土器（第12図81～84）

本類は、いづれも1号住居址の上面にあたるA、B両トレンチ各3、4区の、0～33cm間の出土土器である。81～84が含まれ、82、83が器厚1cmの他0.6cm位となる。褐色系をとり、焼成のよい胴部破片である。81は、平行沈線による浮隆線区画内に、斜行する細沈線を充填しており、82は、隆線及び蛇行沈線による区画をもち、83、84は、曲線と蛇行沈線による区画をもって、それぞれ縱方向の整った細沈線を密に施文している。縄文中期後半の曾利Ⅲ式に平行するものであろう。

#### 第12類土器（第12図85、86）

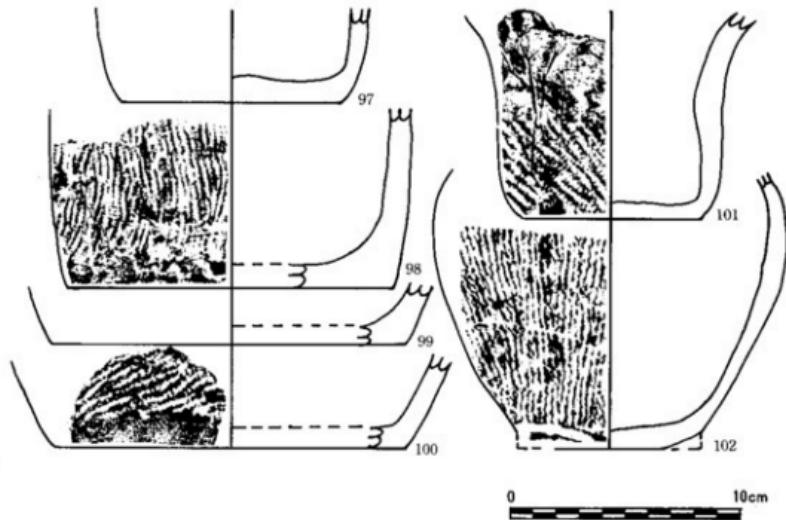
本類に含まれるのは85、86の2例である。85はA、4区の0～34cmより、86はB、4区の北壁落ち込み内よりの検出である。共に器厚0.9cm、焼成のよい胴部破片である。施文は綾杉状の沈線文が施され、更に85では蛇行沈線文が、86では微隆線が縱方向に垂下している。縄文中期後半の曾利Ⅲ式に比定され得る。

#### 第13類土器（第12図87）

87の1例のみである。縦1の遺物処理がなされ、器厚0.7cm、焼成、胎土よく、赤褐色をとる胴部破片である。縄文地文の上に、円形をなすであろう微隆起の曲線が配されるが、本類は、縄文中期後半土器に伴出例が多い。

#### 第14類土器（第12図88）

出土例は88のみである。A、5区より出土し、器厚は0.5cm、胎土、焼成共によく赤褐色となる。壁面のよく精製された波状口縁部で、口縁に沿い1条の微隆線がめぐり、その上面に爪形文



第13図 第1号住居址出土土器(1:3)

を連続させ、更に8字状の小さな貼布文をおき加飾している。縄文後期初頭の掘の内式に相当する土器である。

#### 第15類土器（第12図89～96・第13図97～105）

本類は土器底部を1括し、更にこれを施文面から、a、b、cの3分類とした。

a類は、無文となる類をまとめた。89、90、92、93、96が含まれる。器厚が0.7cm前後を示すもの多く、胎土、焼成は概してよい。この中90は、遺物番号N.14として検出されたもので、底径は6.8cmとなり、網代底であるが、内外の壁調整はやや粗雑である。コップ状小形土器である。89は、底径6.2cm、92は、7.2cmを示し、壁調整は概してよい。共に小形ながら、その基部より外傾の度を広めて立ちあがる。93は網代底となり、壁調整はよく、底径7.6cmを数える。立ちあがりはやや急な形を示している。96は壁調整の悪い粗成土器で、底径8.2cmを数える。器形は壁が底部より内側へ屈折の度を強めて立ちあがるが、全体像をうかがい得ない。いづれにしても異質な器形となる土器であろう。

b類は91の1例のみである。床面直上出土で、器厚0.7cm、底径7cmの小形土器である。壁面調整をよくし、胎土、焼成共によく、黒褐色系をとる。基部より直立する器形をとり、底部近くを巾広く無文帶とし、腰部に降帯を1条巻きさせているが、その上面に斜めの爪形文を連続させている。

c類は縄文施文土器をまとめた。94、95、97～102が含まれる。焼成はよく、総じて赤褐色系となる。94は、N.18の遺物整理番号をもち、中位の節と条をもつ縄文が、器の全面に施される。壁面調整は悪く凹凸が目立つ。器厚0.6cm、底径6.2cmのコップ状土器である。95は器厚0.5cm、底径5cmの小形コップ状土器で、中位の縄文が付される。97はN.10の遺物番号をもち、器厚0.7cm、底径9.5cmで、中位の縄文をもち、器の立ちあがりは、直立の傾向をみせるが、その基部は丸味がある。98はN.7の遺物整理番号があり、器厚1cm、底径14cmと大形になる。繊細な縄文が器の全面を覆っており、壁の立ちあがりは急な直立で、その基部に角がある。99、100は共に器厚1cm、底径15.2cmで、中位の縄文施文となり、基部より外傾の度を広めて壁はたち上がる。大形土器底部を想像させる。101は器厚0.8cm、底径7.6cmで、基部より1且直立した壁が、その腰部において、急に外傾して開く特異な器形を示している。壁調整はよく、底部近くに中位の縄文施文帶があり、更に腰部にかけては、無文帶を残している。102は底部の1部が全面に剥落しているものの、底径は8cmを数えて、器厚0.7cmを記す。全面に縄文施文となる。然し、胴部の欠損部に僅かであるが、隆線による曲線区画があり、内部に刺突による波状文を残している。立ちあがりは、ゆるやかに外傾して張り出しをみせるが、胴部にいたり球状に集約の傾向をみせており、若干異質な器形となる。

(大久保知巳)

#### (2) 石器（第14図1～9）

1号住居址出土石器は、検出された土器の多量に比し、意外にも極めて少くない数値を示した。石器は、いづれも床面直上や、1号住居内覆土中に包含されたもので、今その種類別個数をあげると、打製石斧2個、石鏟2個、圓石3個、叩石1個、磨石1個の以上である。

(1) 打製石斧 件数2個で1、2が含まれる。1は**6**3の遺物処理番号をもつ。硬砂岩質で、大きさは、長さ10.5cm、最大巾5cm、厚さ1.3cmで、刃部が頭部より巾広となる。いわゆる撥形を成す形の良い完形品である。又、刃部が両面から磨込みを加えている局部磨製で、類例に乏しく、厳密な意味での打製石斧ではない。2は、**6**8として検出された遺物で、下半部を欠損している。現存の大きさは、長さ10cm、巾5.8cm、厚さ2cmで撥形を成すらしく、材質は、青灰色を呈する凝灰岩とみられる。

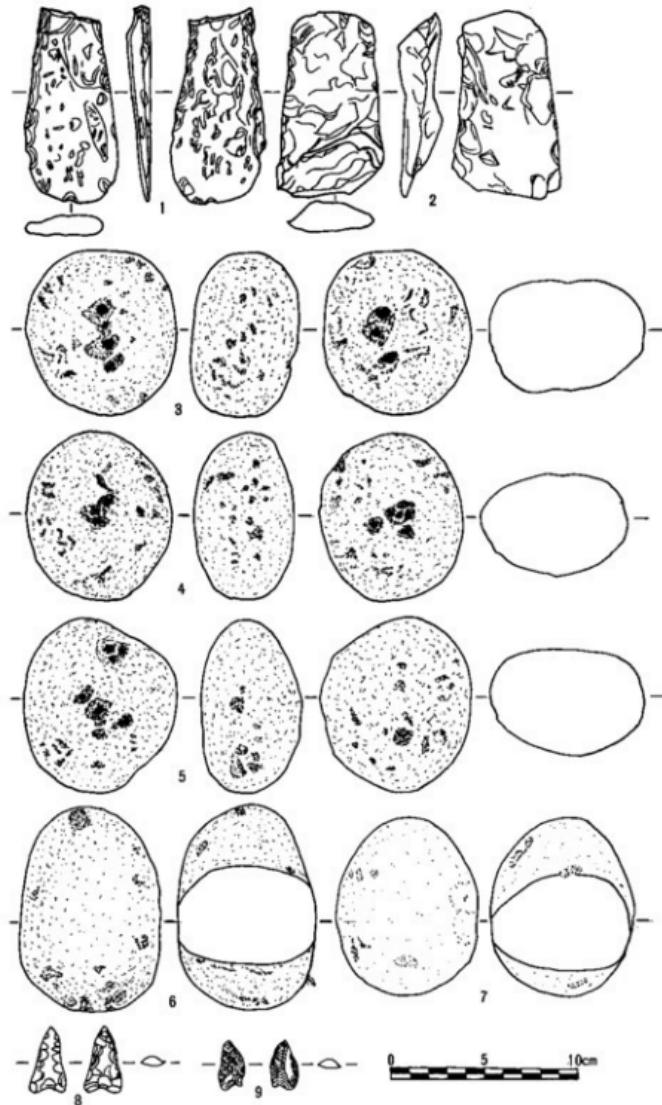
(2) 凹石 3~5の3個が含まれる。いづれも1号住居址の上層部にあたる-14~-40cm間の出土であり、いわゆる花崗岩質の完形品である。大きさは、3が9×8×5.7cm、4が9×7.8×5.4cm、5が9.4×8.2×5.5cmで、ほぼ同形の大きさを示している。凹の穴は、やや整然さを欠くものの、両面に3個づつを数えるものが多い。

(3) 叩石 6の1例である。Bトレンチ3区の-40cmより出土する。花崗岩質で、大きさは長さ11×巾7.5×厚5.3cmを示し、縱長の上下端部に叩きの打痕を残している。

(4) 磨石 7が該当する。**6**11として遺物検出された磨石で、大きさは、9.7×7.7×5.3cmである。顯著な磨面を残すまでにはいたっていない。

(5) 石鐵 8、9の2個が含まれる。8は覆土中の**6**6としての検出番号をもち、頁岩製の完形品で、2等辺3角形の基部に抉りを入れている。大きさは、3.6×2×0.5cmである。9は床面直上検出であり、透明の黒曜石製品である。大きさは2.8×1.5×0.5cmで、形は不整である。

(大久保知巳)



第14図 第1号住居址出土石器(1:3)

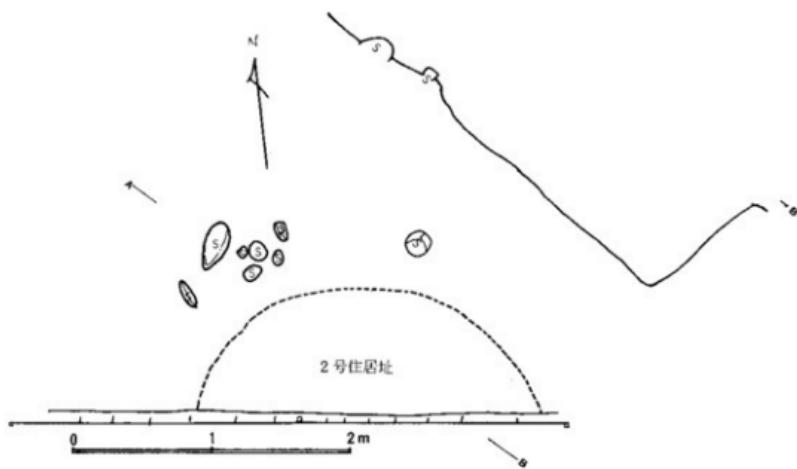
## 2. 第2号住居址と遺物

### 第2号住居址（第15図）

第2号住居址はAトレーナー6、7グリット南側部分に円形プランの三分の一程度が検出された。本址は地表下41cmと浅く、耕作土層に統一して平均6cmの厚さの黄褐色土を張り床としてかためてあった。この張り床は小石を全く含まない粘土質の土で堅緻で、その範囲を住居址としたが、炉址、柱穴、壁等は検出されなかった。住居址の北西には20×40cmの大石を中心として20cm大の石が6ヶ所散在していたが住居址との関係は不明である。

遺物は耕作土中と、住居址床面より浮いた状態で出土をみたが、床面に密着したものはなかった。さらに床面下からも多量の遺物が出土し、張り床との前後関係を考えると、その遺物は明らかに張り床がつくられる以前に使用されていたものとなり、本址の時代決定には使えず、床面浮上の土器片をもって時代決定をはかりたい。

（神沢昌二郎）



第15図 第2号住居址実測図

### 第2号住居址の出土遺物（第16、17図）

本址床面上部と下部より出土した土器片は237片で、その中心は縄文中期中半で石器は打製石斧が1点である。土器片はいずれも小破片で器形の全体を伺い知るものはないが、その主なものを取りあげて紹介する。

#### (1) 床面下出土遺物

1、2は縄文前期末の諸種C式土器片で、1は平縁で口縁部に3条の爪形文をめぐらせ、その

下部に縄文を付けている。色調は外面は明るい茶色、内面はやや黒色を帯びた茶色で、縦に調整痕がある堅敏な小型土器である。2は3条の結節浮隆線文をもち黒色を呈する。前期土器片はこの他に1点の計3点のみである。

3以降は中期中半から後半にかけてのものでこの時期のものが主体を占める。

a 爪形文ないしキャタピラ文で勝坂式に比定されるもので、3は大きくふくらんだ把手部分で、外側は一穴で他に文様が張り付けられていたが剥落している。内側はあたかもふくろうの両眼のようで、一眼には円周に爪形文を施し、他の一眼は釣りあがった眼のように穴の外側を沈線でくまどっている。茶褐色で堅敏な土器である。4はキャタピラ文の下に横に隆帶をめぐらせ、爪形文と縄文の地文に波状沈線を施している。外面は一部剥離している。

b 隆帶と刻目文のあるものをまとめた。5は区画文の胴部、6は区画内に浅い円形刺突を施すもの、7は波状口縁の一部で隆帶に逆八の字状の刻目をつけ、口頭に縦に沈線を施し一部に交互に刻目を入れている。いずれも黒褐色で5は胎土にやや雲母を含み、6、7は堅い焼成である。8は、無文地に刻目のある隆帶を施し、あたかも縄の結束を示すかのようである。深鉢胴部と思われるが、推定直径は16cmで外面上部には炭化物が付着している。焼成堅敏。9は縦の隆帶間に深く施文具を引いて、沈線というよりは低い隆帶を施している。主隆帶の両側は裾っぽまりになり、そこに浅い刺突をおき肋骨状をなす。外面赤褐色、内面黒変の白微粒を含む胎土である。10は本類とはやや異なるが縦の2~3条の区画内に横に波状と平行の沈線を重ねている。外面赤褐色、内面黒変の胎土に白微粒を含む。11は浅鉢と推定される口縁部で山形突起を連ね、その両面に深く太い刻目と太い沈線をめぐらせ、外面口頭には三叉状と思われる施文をしている。堅敏な重い土器である。

c 隆帶のみの重孤文で、12は推定口径22cmで数箇所に口唇を肥厚させそこに平行沈線を施している。口縁には巴形の隆帶で区画し、その中を渦巻と同心円の沈線を施している。赤褐色で胎土に白微粒を含む。13はつよく内側する口縁部で縦に平行する隆帶を貼り付け一部に孤線を施している。

d 縄文のあるもので、14は地文に縄文を施し、細い隆帶2本と沈線で区画している。隆帶は一部剥落しているが、結んだようになっており沈線にも刺突を加えてアクセントをついている。直径9.5cmの小型土器である。15はやや内側する口頭近くの破片で縄文地に沈線で円形の磨消があるらしい。16は縄文で内径10cm、14、16は内面黒変している。17は素縄文で小破片である。18は底部で地文に縄文が施されている。底近くは無文でヘラ磨きがされて底板は剥落している。推定底径 cmの明るい茶色の堅敏な土器である。

e 無文土器であるがいずれも破片だけであるので、これらの上部又は下部はどんな文様かわからない。19は口唇が平らなやや厚手の口縁で内外とも黒褐色である。20も複合口縁で薄手の土器21は肥厚して内側はくの字状を呈する。内外とも黒褐色の推定口径13cmである。22は深鉢胴部で上部でやや反りかえっている。胎土には小石を含むが焼成は良く、外面灰茶色、内面はやや黒色を帯びる土器である。23は小型土器底部で直徑7.5cmの明るい茶色で内面は黒色を呈する。良質である。24は浅鉢が大きく外反する底部で底は網代である。外面は黒褐色、内面黒色の磨かれ

た土器で胎土に雲母を含む。

(2) 第2号住居址出土土器遺物（第17図）

ここからの出土は87点で床下出土遺物よりも少い。全体にみて時期的には床下出土土器との時代差はほとんどない。全てが縄文中期土器片で

a キャタピラ状文又はそれに類するもので、1は口縁部近くの破片で厚く持ち上った把手でそこに爪形文と三角状の沈線を施し、把手の下には爪形文と沈線および円形刺突を施している。胎土焼成とも良い藤内式に類似する。2は底部近くのキャタピラ状文である。

b 隆帯と刻み目文のあるもので、3は隆帯と刻み目をつけ、その外側には平行に沈線を施している。赤褐色の微砂粒を含むもの。4は綫にうねったU字状の低い隆帯とその横に沈線を施しているもので、外面赤褐色、内面下部は黒色化している。胎土はやや粗い。5、6は同一器体で巾広く薄い隆帯を円形に施し、胴部中央あたりで横に一本の隆帯が交わり、その下には綫の平行沈線を施しているらしい。茶色で一部黒色化している。胎土焼成共に良い。

c 縄文の土器で、7は粗っぽい器面調整の上に縄文を施してあるが縄文ははっきりしない。現在直径25cmの大型土器で赤褐色の堅緻な土器である。8は算盤玉状の底部で一見撚糸文とみえるが施文具を押し引きしている。住居址外の集石中より出土した破片と同一のものである。外面赤褐色、内面黒色である。

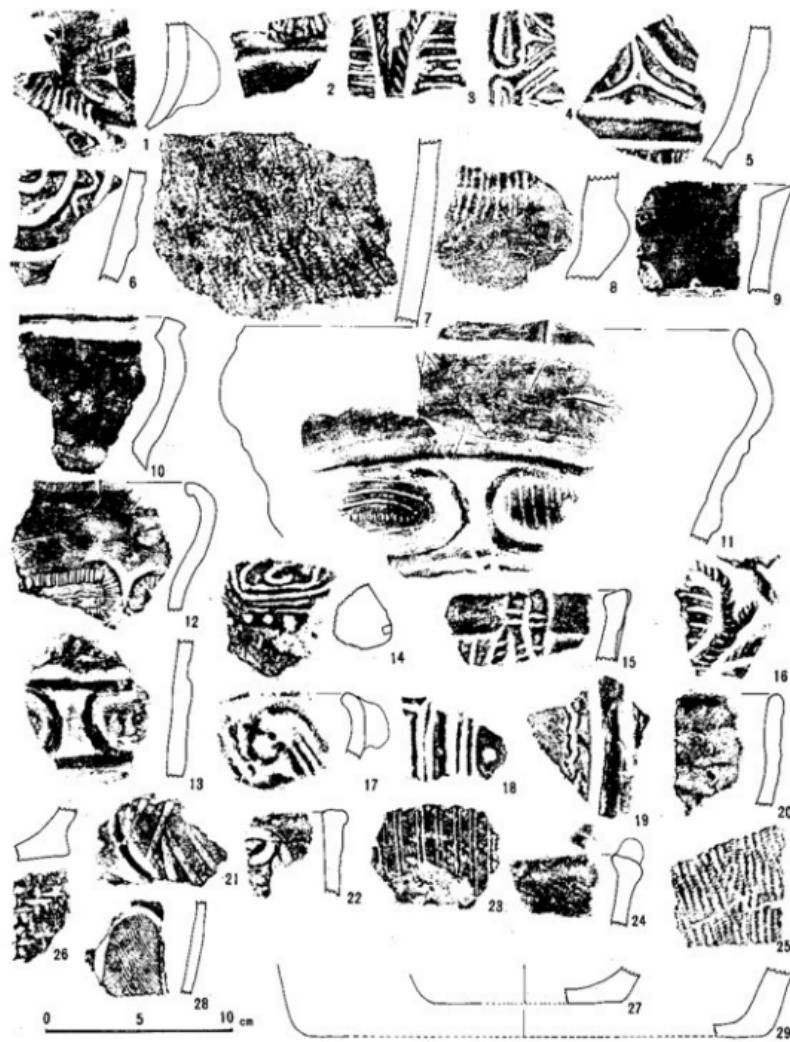
d 無文土器で、9は外反する口縁部で口唇は2.3cm巾で内傾している。10は内彎する口縁部で推定口径39cmを測る。口唇内部は一部欠けているが、外側にくの字状に反っている。9、10共に明るい茶色の堅緻な土器である。

なお2、4、6は集石中出土であるが一括した。

(神沢昌二郎)



第16図 第2号住居址床面下出土土器およびA Bトレーナー出土土器



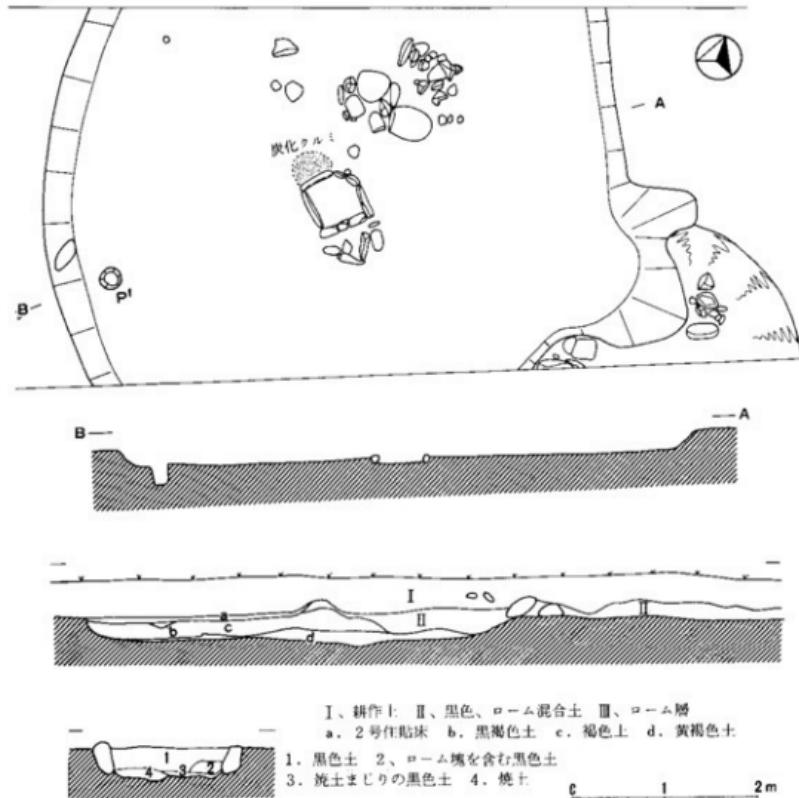
第17図 第2号住居址覆土出土土器およびA Bトレンチ出土土器

### 3、第3号住居址と遺物

#### 第3号住居址（第18図）

第3号住居址は、A、Bトレンチ7～9区の範囲から発見され、第1号住居址の東方 2.5mに位置している。この第3号住居址の南半部分が第2住居址と重複しており、第3号住居址床面より22cm上位に第2号住居址の床が構築されている。したがってこの第2号住居址の床面下が第3号住居址の覆土ということになる。

第3号住居址はその掘り込みが余り明瞭でなく、床面の検出も不明確な部分があった。壁は西東壁が検出されているが、南、北壁は道路建設区域外のため未調査である。このため住居址全体のプランは判然としないが、径 6 mほどの円形ないしは梢円形を呈するものと推定される。西壁は良好に残存しているが、東壁はその一部に小窓穴状の掘り込みがあるために擾乱がみられる。



第18図 第3号住居址（I : 60、炉断面のみ I : 30）

壁高は西壁で20cm東壁で19cmであり、掘り込みはほぼ垂直になされているが、残存状態は余り良くない。床面は全体的に平坦であるが、軟弱で良好な床とは言い難い。炉址北方には50×30cmの大きなものから、拳大の小さなまでの礫が1.5×1.0mの範囲内に集石している。床面直上に散在しているものと、床面から10cm前後浮上しているものとがあり、全てを本址に伴なうものと考えることはできない。他地区で検出された集石群と同一の性格を有するものかもしれない。集石下からは掘り込み等の施設は認められなかった。

炉址は中央部に設けられ、65×65cmの正方形を呈する石囲炉である。使用している石は長さ40cm、幅15cm、厚さ10cm程の扁平なものを用いている。炉底までの深さは16cmで、底面は平坦となっている。焼土は余り顕著ではないが、炉底付近の黒色土には焼土がブロック状に含まれていた。また炉址内覆土には炭化物がやや多量に含まれていた。柱穴と思われるものは1箇所検出されている。23×24cm、深さ18cmで、西壁下にある。

本址で注意された点に、炉址北側の床面上に、炉址に接するようにして45×25cmの範囲にひとかたまりとなって炭化したクルミが多量に出土したことがあげられる。炉址内覆土上層からも炭化物が多く検出されていることを考え合せると、破殻を燃料にしたものか、あるいは乾燥させていたものか、炉端に食用として一回分ほどの量を置いてあったものかと種々推定されるが、その性格は判然としない。

遺物の出土は、第2号住居址の貼床下に多く、床面上からは余り出土がみられなかった。またシカと思われる骨片および骨粉が覆土中より出土したが、かなり上位からの出土であったことから、住居址とは時間的に差があると考えられる。本址の時期であるが、出土土器は藤内式から曾利式までかなり幅がみられるが、その主体は藤内式であり、この時期にするのが妥当であろう。

(小林康男)

### 第3号住居址の出土遺物（第19～21図）

#### （1）土器（第19、20図）

出土した土器はみかん箱一杯ほどあるが、その大半が破片であり、資料として活用可能なものは、第19図、20図に取上げたもののみであった。1は底部の破片で、底径16cm、くの字に張る屈折底部である。屈折部に隆帯による楕円形の横帶区画文が配され、内にキャタピラ文が施文されている。この上部には一条の横走る沈線をはさんで、継位の沈線文が施されている。2は本址出土の中で、凡そその器形が分かれる唯一の資料である。やや内縛する口辺部と綺麗な脣部を有する器形で、口径15.5cm、口辺部から脣部にかけて全面にわたりR Lの繩文が施されている。内面の脣部下半にススが付着している。3は指圧整形痕を顯著に残し、隆帯による区画文の一部がみられる。4も指圧整形痕を残し、隆帯上に繩文をもつ三角形の区画文とそれより垂下する隆帯文を施文している。5は小突起を付し、その周間にキャタピラ文を巡らし、更にその外部に沈線のジグザグと繩文とを施している。6はキャタピラ文と沈線文を、7は三角形の押引文を施文している。8は口辺部の破片で、隆帯による区画文を、その内に継位の沈線および連続コの字文を交互に配している。9は刻目を有する隆帯と沈線とによって構成された脣部破片で、18も同様

である。10は横走する隆帯と沈線の三角形区画文を、11は三角形区画文とその内部を斜行する沈線文を施している。12～14は同一個体の土器片と思われ、幅広の隆帯による渦巻文とその周囲を沈線文が巡っている。16・17はともに口辺部に無文帶をおき、その下位に隆帯による梢円区画文が配された口辺部破片である。16は部厚い平縁の口唇部をもち、17はキャリバー状に内彌する形態である。第20図1～4、6は隆帯による蛇行状文を有するものである。1は肥厚した口唇部下に蛇行状文を横走させ、その下位に隆帯による文様を配している。2、3は蛇行状文の下に一条の沈線文をめぐらし、その下に位に隆帯による文様を配している。5は把手を密な沈線文を施している。9は山形口縁部の一部で、10は縁位の隆帯による刻目を有する底部の破片である。11・12は粘土帯を指頭で圧痕してえられる連鎖状隆線がめぐり、その周囲を沈線で縁取っている。浅鉢形の器形を示すものであろうか。13・14は柳形文の一部である。15は隆線によって区画されその内部に縄文を埋めた口縁部破片で、16は条線の地文に沈線による渦巻文が施文されている。

### (2) 石器（第20図）

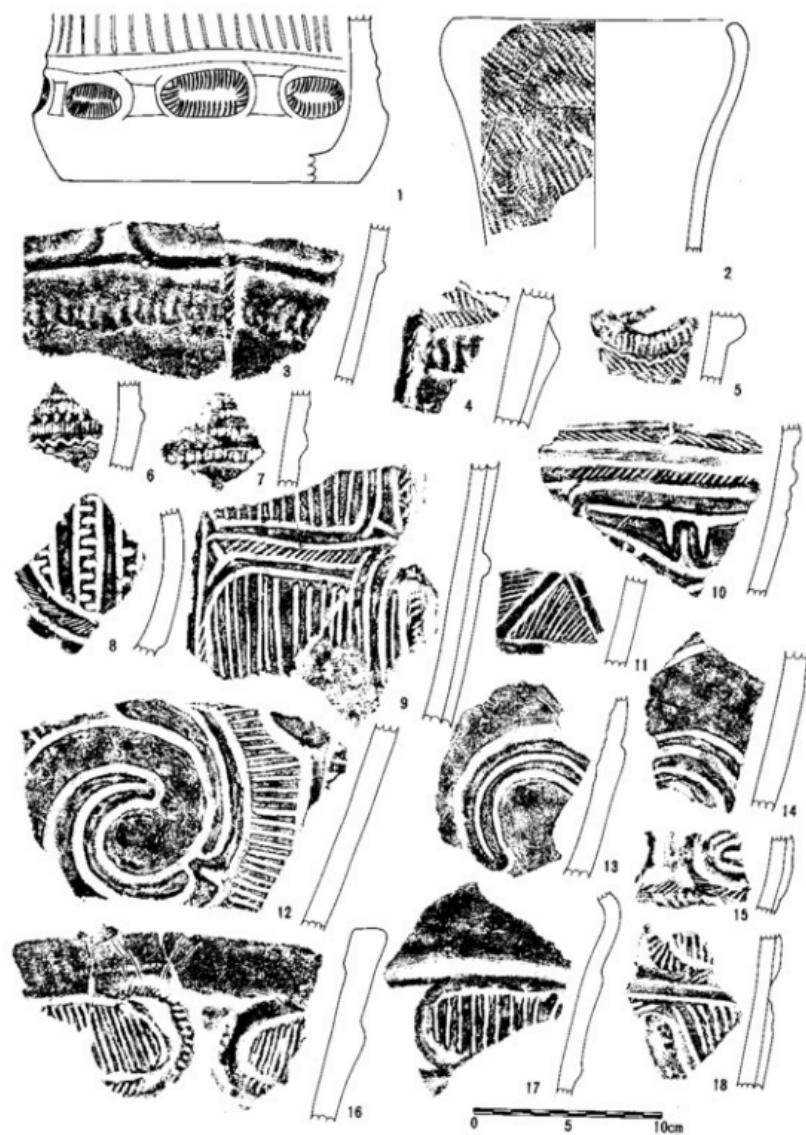
石器は打製石斧1、磨製石斧1、砥石1、凹石、磨石、叩石兼用品2、磨石1の計6点の出土があった。縄文中期前半の住居址としては、その出土量は極めて僅少といえる。

打製石斧17は表面に原石面を大きく残し、加工は粗雑である。珪質粘板岩製、重量112g。磨製石斧18は脣部以下を失なっている。定角式で製作は丁寧である。周縁がひどく破損している。大理石？製、重量129g。19は一見すると磨製石斧のように見うけられるが、各面がロープをもち、部厚く砥面として研磨されていることから砥石と推される。凝灰岩製、重量101g。20は円形礫の中央部に表裏面とも打撃の集中による深い凹みをもち、全面にわたって研磨がなされている。また周囲は打撃によると思われる幅1.5～2cmのザラついた面が全周に認められる。21も20と同様の形態をもち、表裏面に深い凹みがあり、全面に研磨痕が残され、全周にわたって打痕がみられる。20は凝灰岩、390g、21は花崗岩、400gで、ともに凹石、磨石、叩石の三つの用途を兼ね備えた石器であったと考えられる。22は表面に平坦な磨面をもつ磨石で、疊岩製、470g。

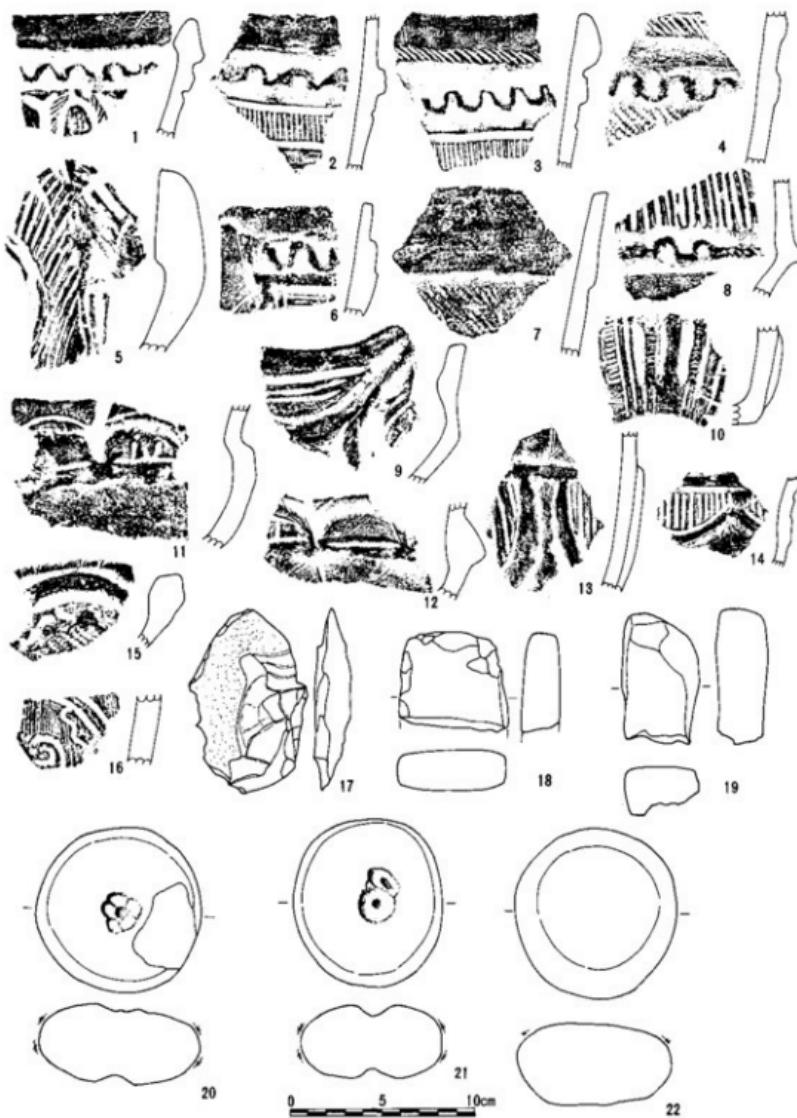
### (3) 土製品（第21図）

土製品としては土偶が一個出土している。特別な出土状態は示さず、住居址覆土中から他の土器片とともに出土した。脣部破片で、現存長4.1cm。断面は板状を呈し、首部から脣部にかけて径2mmほどの小孔が貫通している。正面には腕の付け根の部分に乳房と思われる円形の小さな突起を付している。右腕の付け根の所には剥落してしまったような跡が認められる。脣部から脣部にかけては3本の縦の沈線が描かれている。脇には1本の縦の沈線とそれに直交する沈線がみられる。背面には両肩をつなぐようにゆるやかな弧線を2本描き、両端にはそれぞれ沈線が施文されている。砂粒を少量含み、赤褐色を呈し、焼成は良い。

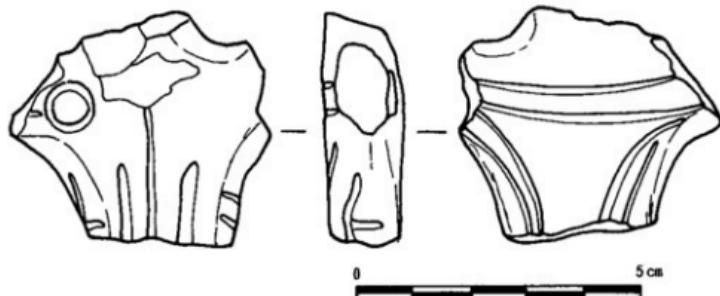
（小林康男）



第19図 第3号住居址出土土器(1:3)



第20図 第3号住居址出土土器・石器(1:3)



第21図 第3号住居址出土土偶

#### 4 その他の遺構と遺物

##### (1) 遺構

ABトレンチ内には別項記述の住居址および墓壙の他特記する遺構はないが、A-9、A-11などにピットがあり、そこより縄文中期土器片が検出されている。尚、Bトレンチに下記遺構があるかがえる。

##### 小堅穴（第5図）

Bトレンチ3～5区の北壁セクションによれば、第1号堅穴住居址の、未掘部分にかかる覆土の状態を、よく知ることができる。又、これと同時にこの覆土は、1号住居址のはば中央部分に、同址廃絶後、別の深いピット状施設が設けられ、活用された後、再び廃絶して、埋没堆積したものであることがわかる。このピット（小堅穴）は袋状を呈するものと判断されるが、その推考規模は、上面径が約125cm、底部径約70cm、深さ約147cm（ローム面上での数値は、上部径約100cm、深さ約70cm）の数値を示していた。このピット内の底部には、厚さ約4cm、長さ33cmの偏平な石が平におかれ、その上面からは、縄文中期後半の土器片が微量検出された。

（神沢昌二郎・大久保知巳）

##### (2) 遺物（第17図、石器のみ第16図）

表面採集も含めて105片の遺物が検出されているが内耳銅片および縄文後期に属するもの数片の他は縄文中期が全てである。

a キャタピラ状文とそれに類似したもので、11は口径27cmの内縁する口縁であるが、口唇は小さく外反する。口頭は無文の下に低い隆帯で梢円文を描き、その中に沈線で円弧と列点と縦の沈線を施している。色調外面茶黒色、内面茶褐色、薄手の堅い土器である。表採品、12も内縁する口縁部でキャタピラ状文を施している。茶褐色の胎土焼成共に良い堅緻な土器である。13は胴部に梢円隆帯を持つもので地文は無文である。器面には阿玉合式土器によくみられる縦に小さな凸凹がある、黒褐色、内面は黒化している。胎土に雲母混入、A-1グリットの-40cmより出

土。14もこの類に入れたが梢円渦巻状の浅い沈線と径 4.5mm、深さ 5~6mm の円形刺突文を連ねたもので器体としては把手か位置不明である。明るい褐色の胎土に 6mm 程の小石を含むが焼成は良い。

b 隆帯と刻み目文のあるもので、15は口径約 12cm の複合口様で口唇から縦に二本の隆帯をつけ横に刻み目をついている。灰茶色の微砂粒を含む胎土である。16は胸部か隆帯に刻み目をつけ、その中は浅い斜沈線を施している。赤褐色で焼成胎土良。17、18は同一器体で重弧文と似たうねった隆帯と円形刺突で、口縁は内彎する。こぶ状の把手をついている。茶色の胎土に白微粒を含む。A-11のピット内出土、19は隆帯とうねった縦の沈線で外面茶褐色・内面茶色を呈する深鉢胴部か。

c 無文と沈線のある土器で20は口縁部で下部に低い隆帯がくるらしい。21は棱形、22は平縁の口縁に浅い梢円状の沈線を施している。いずれも赤褐色を呈している。23は半裁竹管で浅く引く平行沈線で口頭近くと思われる。地文には粗く繩文らしい施文がある。厚手で胎土に白微粒を含む。

d 繩文の施されたもので、24は球状把手をもつ口縁で細い斜繩文を施してある。灰茶色のやわらかい土器である。25は全面繩文で現径 11cm 程度の深鉢胴部である。内面黒色で一部炭化物が附着している。

e 土器底部で26は網代底、27は無文底である。26は外反、27はやや内彎する。共に茶褐色で27は胎土に微砂粒を含む。共に A-1 耕作土より出土。

f 後期に属する土器で、28は細繩文と浅い沈線を施している。薄手の深鉢胴部で黒褐色、A-B-5 出土。

g 内耳鍋底部で底径約 25cm。堅いややざらついた胎土で底部は荒れている。外面黒褐色、内面茶褐色。AB-1 耕作土出土。

h 石器を一括した。1~3は打製石斧で、完形はなく、1は短冊形で刃部に磨痕を残している。硬質砂岩の重量 100g、2号住居址床面下出土。2は楕形で刃部を欠く。表面に原石面を残している。硬質砂岩 150g A-B-1 耕作上出土。3は刃部が三角状にとがり磨痕を残す。緑泥片岩。60g AB-13 出土。4は黒曜石剥片で側面にリングがある。15g、AB-5 覆土出土、5は横型石ヒ破片で一部原石面を残す。緑泥片岩。10g、AB-5 覆土出土。6はスクレーパーでチャート製 8g、AB-1 耕作土出土である。

(神沢昌二郎)

### 第3節 中世

草原遺跡において今次の緊急発掘調査の結果発見された遺構は、縄文式の土器・石器などを伴う縄文式時代の遺跡と、中世（鎌倉～室町時代）の文化遺産と考えられる内耳土器・天目茶碗・常滑焼系の陶器・鉄鎌・鉄たがね・鉄釘・鉄洋などと共に伴う中世の墳墓と考えられる墓壙群とに分けられる。本節においては専ら中世の墓壙群を取上げて報告する。

墓壙群はこれを分けて、地中に長方形又は楕円形に穴を掘り込んだ土壤と、この土壤の上に大小様々な石を載せ集めた集石墓（壙）と、地中2m以上も垂直に掘下げて、その下部を円錐形に掘り抜け墓壙とした特殊墓壙即ち地下式の土壤又は地下式墓壙の三種類に大別される。

そのうち分けは総数37、うち墓壙（墓穴）23、集石墓壙13、地下式墓壙1となる。

#### 1. 墓壙（土壤）

##### 第1号 墓壙

本壙はBトレンチ11区で深さ20cmの地点において発見され、その大きさはたて118cm（東西）横100cm（南北）のほぼ方形をなして黄褐色のローム層に掘込まれている。伴物の遺物は認められないものである。

##### 第2号 墓壙

本壙はAトレンチ11区で深さ24cmのところから発見され、その大きさはたて94cm、横60cmのもので楕円形をなしてローム層に掘り込まれている。遺物としては180gの鉄洋1個が出土している。

##### 第3号 墓壙

本壙はCトレンチ2区で深さ26cmのところで発見され、たて126cm、横はおよそ120cmと推定される楕円形にローム層に掘込まれている。伴出の遺物は認められないが、遺構内にはたて10cm横10cm、深さ（ローム層中）22cmの小ピットがある。本壙の東側は一部未掘である。

##### 第4号 墓壙

本壙はCトレンチ2区で深さ30cmのところから、たて64cm、横およそ38cm（東側一部未掘）の半円形にローム層中に掘込まれている。伴出の遺物はない。

##### 第5号 墓壙

本壙はCトレンチ2～3区で深さ33cmのところから、たて132cm、横およそ80cmの長方形にローム層中に掘込まれている。伴出の遺物は認められなかった。

##### 第6号 墓壙

本壙はCトレンチ3区で深さ67cmのところから、たて150cm、横110cmの楕円形にローム層中に掘込まれている。伴出の遺物は認められない。

##### 第7号 墓壙

本壙はCトレンチ5～6区で、たて130cm、横は畠地で未掘のため不明であるが、深さは100cm

でローム層中に円筒形に掘込まれている。壙底より細粉化した人骨片が出土している。

#### 第8号 墓壙

本壙はCトレンチ6区で発見され、たて 110cm、横 100cm、深さ 90cmで梢円形を呈してローム層中に掘込まれている。

壙内よりは内耳土器片2、ふいご羽口片1、鉄滓3（重量 200g）が発見されている。

#### 第9号 墓壙

本壙はCトレンチ8区で発見され、たて 56cm、横 54cmのほぼ円形を呈してローム層中へ 20cm掘込まれている。伴出の遺物はない。

#### 第10号 墓壙

本壙はCトレンチ8区で深さ 30cmで発見され、たて 64cm、横 58cmの不整形を呈してローム層中に掘込まれている。伴出の遺物はない。

#### 第11号 墓壙

本壙はCトレンチ8～9区で深さ 38cmのところで発見され、たて 84cm、横 68cmの梢円形に掘込まれている。伴出の遺物はない。

#### 第12号 墓壙

本壙はCトレンチ9区で深さ 30cmで発見され、たて 172cm、横は一部未掘のため不明で不整形にローム層中に掘込まれている。

#### 第13号 墓壙

本壙はCトレンチ9区で深さ 20cmのところから発見され、たて 186cm、横 120cmの長方形にローム層中に掘込まれている。伴出遺物は内耳土器片1、木炭の細片が出土している。

#### 第14号 墓壙

本壙はCトレンチ9～10区で深さ 36cmのところから発見され、その大きさはたて 130cm、横は第15号墓壙と切合っているため不明である。そのため形も不明である、伴出遺物はない。

#### 第15号 墓壙

本壙はCトレンチ10区で深さ 26cmのところから発見され、その大きさはたて 210cm、横 170cmのほぼ長方形にローム層中に掘込まれている。伴出遺物は内耳土器片2、ふいご羽口片1、鉄滓25その内わけは大5、小20で重量は計 480g と多い。

#### 第16号 墓壙

本壙はCトレンチ12区で深さ 20cmのところから発見され、その大きさは長さ 80cm、横は不明であるが、その形態から推して長方形と認められる。伴出遺物は認められない。

#### 第17号 墓壙

本壙はCトレンチ12～13区で深さ 17cmのところから発見され、その大きさはたて 228cm、横は一部未掘のため明確を欠くも、現況から推して長方形のものと推定される。伴出遺物は認められない。

#### 第18号 墓壙

本壙はCトレンチ16区で深さ 32cmのところで発見され、その大きさはたて 120cm、横 94cmの

不整形にローム層中に掘込まれている。伴出遺物は鉄たがね1、釘1である。

#### 第19号 墓壙

本壙はCトレンチ17~18区で深さ26cmのところで発見され、その大きさはたて144cm、横は一部畠地で未掘のため不明なるも、現況から推して長方形のものと認められる。伴出物としては鉄鎌1点が出土している。

#### 第20号 墓壙

本壙はCトレンチ20区の深さ28cmのところから発見されたもので、その大きさはたて142cm、横50cmで不整形にローム層中に掘込まれている。伴出遺物はない。

#### 第21号 墓壙

本壙はCトレンチ21区の深さ10cmのところから発見され、その大きさはたて50cm、横48cm円形にローム層中に掘込まれている。

#### 第22号 墓壙

本壙はCトレンチ22~23区の深さ10cmのところから発見され、その大きさはたて150cm、横は一部畠地のため未掘で不明であるが、およそ椭円形にローム層中に掘込まれている。伴出遺物は鉄滓1(重量25g)、内耳土器小片1である。

#### 第23号 墓壙

本壙はCトレンチ24~25区で深さ20cmのところで発見され、その大きさはたて206cm、横46cmの長い不整形にローム層中に掘込まれている。伴出の遺物は内耳土器片1、鉄滓3(重量65g)である。

### 2 集石墓壙

#### 第1号 集石墓壙

本壙はBトレンチ11~12区の深さ15cmのところから発見され、その大きさはたて43cm・横40cmである。この墓壙の石は長さ28cm・厚さ9.5cm・巾20cm(花崗岩)、長さ28cm・厚さ16cm・巾18cm、長さ15cm・厚さ12cm・巾18cm、と長さ13cm・厚さ10cm・巾12cmの大小4個の石によって箱形に石囲され、そのほぼ中央部からは銭文不明の古錢が出土している。石質は第1は前記、第2・3・4の石は安山岩である。

このうち第2の石は绳文時代の石皿であるところから、中世になって再利用されたものである。

#### 第2号 集石墓壙

本壙はAトレンチ11~12区の深さ28cmのところから発見され、その大きさはたて70cm・横50cmの不整形墓壙の上に大石2・小石2によって一塊をなしており、その底部から内耳土器片1が出土している。

#### 第3号 集石墓壙

本壙はAトレンチ12区の深さ26cmのところから発見され、たて108cm・横90cmの方形に大小様々な石10数個を集めて作られている。この集石の下にはたて110cm・横94cm・深さ13cmの墓壙が認められる。この墓壙内から内耳土器片6が出土している。

#### 第4号 集石墓壙

本壙はCトレンチ 13~14区の深さ 18cmのところから発見され、その大きさはたて 138cm・横は一部畠で未発掘のため不明であるが、その形はほぼ方形と認められる。伴出遺物はない。

#### 第5号 集石墓壙

本壙はCトレンチ 14区の深さ 17cmのところから発見され、その大きさはたて 190cm・横は一部発掘不能のため確認をかく、形は不整形である。伴出の遺物はない。

#### 第6号 集石墓壙

本壙はCトレンチ 14~15区の深さ 6cmで発見され、その大きさはたて 190cm・横は畠で未発掘のため確認を欠く、現況は不整形で大小様々な集石が土壤の上面に堆積する。

伴出遺物は内耳土器片1、鉄滓5(450g)、木炭片など多量に出土している。また一段と低い落込みより鉄滓10g、木炭多量が出土し、壙の底部に鉱物質の敷物とその下から砂が敷かれている状態で発掘されたのである。本壙は伴出遺物も多く且つ埋葬方法が他のものより丁寧であったのである。

#### 第7号 集石墓壙

本壙はCトレンチ 14~15区の深さ 6cmという浅い個所から発見され、その大きさはたて 190cm・横 130cmの不整形で、壙の上部には大小さまざまの石が多量に集められていた。

伴出遺物はふいご羽口3、内耳土器片1、鉄滓大小18(重量 750g)の多量である。

#### 第8号 集石墓壙

本壙はCトレンチ 15区の深さ 12cmのところから発見され、その大きさはたて 50cm・横は一部未掘なるも凡そ 50cmである。形は不整形で中位の石7個をもって集石されている。

伴出遺物は内耳土器片1である。

#### 第9号 集石墓壙

本壙はCトレンチ 15~16区の深さ 14cmのところから発見され、その大きさは 104cm・横 160cmである。大小様々な石30個以上によって覆われたものである。

土壤の形は長方形である。

#### 第10号 集石墓壙

本壙はCトレンチ 17~18区の深さ 18cmのところから発見され、その大きさはたて 220cm・横 190cmの不整形のものである。大小数十個の集石で覆われている。

伴出遺物は内耳土器片7、ふいご羽口片3、鉄滓5(580g)、中世陶器(常滑焼)片1、木炭片が出土し内容は豊富である。

#### 第11号 集石墓壙

本壙はCトレンチ 19区の深さ 17cmのところから発見されたもので、その大きさはたて 180cm・横 170cm不整形のもので、大小数十個の石が集められて覆われている。伴出遺物は鉄滓11(250g)、ふいご羽口2、内耳土器片6、黒陶(天目か)片2、褐色陶器片1の多くに亘っている。

#### 第12号 集石墓壙

本壙はCトレンチ 20区の深さ 16cmのところで発見されたもので、その大きさはたて 90cm・横 80cmのものである。大小23個の石が集められている。本壙の形はほぼ円形である。伴出遺物とし

ては鉄滓3(200g)と中世陶器片1である。

### 第13号 集石墓壙

本壙はCトレンチ20~21区の深さ15cmのところで発見されたもので、その大きさはたて80cm・横60cmの不整形のもので、大1・小10の小集石である。伴物遺物は内耳土器片2、ふいご羽口片6、鉄滓1などである。

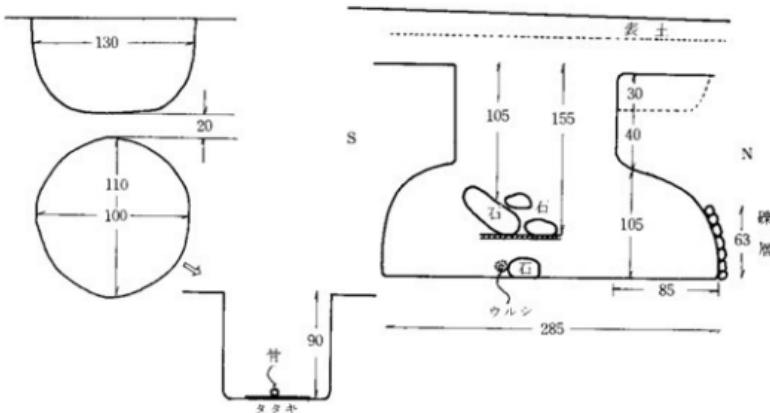
#### 3 地下式土壙（地下式墓壙）

本壙はCトレンチ6区西側の壁面にそって、深さ38cmの黒色表土及びソフトローム層下にあるローム層中に於て発見されたもので、前述の普通墓壙及び集石墓壙とはその趣を全く異にした特殊遺構である。

その構造はまずローム層に南北130cm・東西140cmのほぼ円形の穴を南側で88cm・北側で70cmの深さに達するまで垂直に掘り下げ、そこから漸次掘り広げて行き、北側の肩から115cmで底部に達する。この拡張の度合は南北ともにはば均一である。底部は南北285cm・東西は157cmの長方形を呈している。ローム層の厚さは122cmで、それ以下63cmは疊層である。底部には厚さ2cmのロームを敷つめてあった。

この構造を有する墓壙内は、ロームが上面から90cm詰り、それ以下はロームと疊との混合土によって充たされている。この混合土は、本壙が疊層へ63cmも掘り下げられた結果、その後埋もどし覆土の際にロームと混合したものであろう。

その埋葬状態は上下二層に分れているところから、前後二度に亘って埋納されたものであろ



第22図 地下式墓壙の平面及び断面図

う。上層の埋葬遺構はローム層上面から 105 cm で石に当る石は長さ 50 cm・巾 20 cm・厚さ 18 cm (珪岩) があり、その外 2 個の石でかためて置かれ、その下には骨粉を含む灰層が厚さ 2 cm あった。この灰層の広がりは計測されていないところから不明である。この灰層の下は固くつき固められていたという。

下層の埋葬遺構は底面の中央部にたて 73 cm・横 60 cm の長方形に厚さ 3 cm の骨粉・木灰混合層が広がり、その中ほどには長さ 59 cm・巾 25 cm・厚 18 cm の花崗岩 (自然の川原石) が、下部を 23 cm 埋められて傾斜して発見されている。この花崗岩は死者の枕石又は墓印として立てられたもので、後に土圧によって傾いたものであろう。また灰層外側には朱色の漆の被膜 (10 × 10) が発見されている。これは現在の漆工に見せたところ漆器の上面に厚く塗られた漆であることがほぼ認められ、更に東京国立文化財研究所へ発送して、分析を依頼中であるが、漆膜に間違いないものとの見解をいただいている。この漆器は墓前に供献された食碗で永い年月によって木質部は腐敗し、腐敗し難い漆の被膜のみが残ったものであろう。

伴出遺物としては、火葬骨粉は別として、鉄滓 3 (200 g)、ふいご羽口 1・中世陶器片 1・内耳土器片などが出土している。

本壙は始め前記の大きさと構造を持つ地下式の墓壙が掘られ、下層の埋葬が行われた後埋めもどされ、年月を経た後もう一度掘返され上層の第二次の埋葬即ち追葬が行われたものであろう。

この様に一の壙に 2 体以上の合葬又は追葬をされる場合は、主として第一番には夫婦、第二番には親子であるが、本壙の場合はその伴出遺物から推して、先に鍛冶職である夫が没して埋葬された後に年月を経て妻が没し、その子等によって、追葬されたものであろう。その葬送の方法は土葬によるものなく、他で火葬収骨の後に埋葬されている。

#### 4 溝状遺構

本遺構は C トレンチ 3 ~ 5 区に亘って発見された遺構である。標柱西側第 3 号で表土など深さ 52 cm でローム層に達する。遺構は漸次北側に向って下り始め第 3 号柱より 130 cm 地点で深さ 100 cm に達し底部はほとんど平であるが、225 cm の地点からこんどは上昇し始め第 5 号柱附近でローム層上面に達して終る。このローム層上面は深さ 45 cm である。この遺構は東西に走っており、今次の調査に於ては C トレンチの巾 3 m のに顯れた一部の遺構のためその年代、構造や大きさについては全く何らの手がかれも判っていない、またこれを遺構とするか自然の凹地とするか、決定し兼ねるものである。この様な大きな遺構は周辺の調査を俟って総ての決定を下すべきものであろう。

#### 5 遺 物

##### (1) 鉄 鐵 (図版第 14)

鉄鎌は墓壙第 19 号より出土したもので、全長 7.8 cm・巾 1.3 cm 実根式のものである。年代は他の墓壙からの伴出物と勘案し中世末と推定される。

##### (2) 鉄たがね (図版第 14)

鉄たがねは墓壙第18号より出土したもので、全長7cm強、巾は1.5cm、厚さは0.5cmと推定される。遺物の推定年代は鉄鏃と同期のものであろう。

(3) 鉄 鏃 (図版第14)

鉄鏃は墓壙第18号より出土したもので、同時に伴出した鉄たがねと同年代のものである。

全長3cm、巾0.5cmで断面は角であるところから鍛冶屋の鍛造の古鏃である。

(4) 鉄 淚 (図版第15)

鉄涙は墓壙第2、8、15、22、23、28、30、32、33、34、35、36、37の13箇所から出土し、その総重量は4kgに達している。

(5) 古 銭 (図版第14)

古銭は墓壙(集石墓壙第1号)24号から出土している。銭文は不明で毀れ易くなっている。石圓の墓壙から1枚出土したが、恐らく六道銭の一つであろう。銭文は確認出来ないが現況から日本江戸時代に作られた寛永通宝ではなく中国からの渡来銭であることは間違いない。

(6) 内耳土器 (図版第15)

内耳土器は墓壙の第8、13、15、22、23、25、26、29、30、31、32、33、34、35、36、37の16箇所から出土しており何れも細片に破れており、図上復元すら不可能に近い状態で発掘されている。この内耳土器の出土によってこの墓壙群の年代決定が出来る重要な遺物である。口辺の土器片から、口辺が外側に傾斜している器形、また若干内側に傾いている器形、垂直に立っている器形の三型式があった事が推定される。一部底部の破片から底部とはほぼ直角近い立あがりを見せており、若干の傾斜をして立あがっている2形式が認められる。

(7) ふいごの羽口

ふいごの羽口片は墓壙の第8、15、30、32、33、34、36、37号の8箇所から出土しているが何れも図上復元も不可能に近い細片に毀されている。然し羽口の風道の直径から大小三型式の羽口があった事が確認されている。

(8) 中世陶器 (図版第15)

中世陶器片として、黒陶系の天目茶碗片が墓壙第34号から1片ながら出土している。同じ墓壙から褐色釉のかかった陶器片1が伴出しているがこれも同時代のもので、岐阜県以西の窯で焼かれたものであろう。この天目茶碗の同質同系のものが、梓川を挟んだ北岸の南安曇郡梓川村大字梓の上野の河岸段丘上にある中世の砦址のあらがいと遺跡から2片発掘されている。

中世常滑焼系統と推定する陶器片が墓壙第35号から鉄涙と共に出土している。また中世の灰釉陶器片が墓壙第37号即ち地下式墓壙から、内耳土器などと共に出土している。然し何れも小片である。

## 6 考 察

本遺跡に於て今次調査によって発掘された、墓壙23基、集石墓壙13基、地下式墓壙1基の計37基のうち遺構に伴出遺物を伴わないものは、墓壙23基のうち13基で最も多く、集石墓壙2基である。他は何らかの年代を決定する遺物を伴出している。

この37基がこの葦原遺跡にある墓壙群の総てではない事は、今次発掘地点より西に於て松商学園高等学校地歴部が学術調査発掘の際に既に発見され、そのうち2基について報告されている。

また今次発掘調査の行われたA・Bトレンチ第1区の北西数mの畑地の中には少し盛り上りを見せている場所があり、從来から掘ってはならないと云い伝えられている禁忌地がある。恐らく墓地であろう。本墓壙群は伴出する遺物が中世の内耳土器や、中世器陶片、古錢などを含むところから中世室町時代末期の墓壙群と推定する。また鐵冶屋が鍛造の際に出る鉄滓が4kgも出土しつつ鐵造品である鐵鎌、鐵釘、鉄たがねや鍛造に最も必要な鞴（ふいご）の送風管である羽口が大小合せて三形式も出土しているところから、これら鐵冶に関係する遺物を伴出する墓壙、集石墓、地下式墓壙は鐵冶職と関係するものと考えられ、その箇数の多いところから一軒の墓地とは考え難く鐵冶職集団の墳墓と推定する。伴出物を伴わない墓壙、集石墓壙については年代を決める手がかりを欠き、また鐵冶職集団との関係も判明しない、概論的に云えども、遺跡の南側に墓壙群が多く北側に集石墓壙が多く、伴出の遺物も多い、然しこれも明確な境があるわけなく一部に混在が認められるところから、この墓壙群も同一集団に属する鍛造に直接加わらない妻や子供の墓壙かとも考えられ、年代も同年代と推定する。

この墓壙群の箇々の年代決定は極めかねるが、特殊造構である地下式墓壙は、その構造、埋葬方法の丁寧さや、供獻物の多量から云って鐵冶職集団の先導者夫妻の墓壙と考えられ年代的にいっても最も古いものと推定したい。

なお墓壙の周辺や内外に存在する小柱穴群については、墓の上に雨露を防ぎ且つ狼などの墓荒しを防ぐために作られた喪屋（もがり屋）と呼ばれるもので、現在に於ても南安曇郡安曇村、奈川村方面でカシヤ除けとして新墓に作られている。

本遺跡で発掘された地下式墓壙は、その原流は中国の黃河流域の黃土堆積地帯に發すると云われ吾が国に何時頃伝播したものか判らないが、古墳時代に於ては九州の鹿児島県・宮崎県の両県に多く、そのうちでも、鹿児島県では肝属（きもつき）郡地方の吾平町・高山町・串良（くしら）町をはじめ、そお郡地方の大崎町や姶良（あいら）郡地方や出水郡・伊佐郡・川辺郡の各地にも見られる。宮崎県では東諸県郡八代村・本庄町・高岡町・西諸県郡小林町・飯野町・北諸県郡高城町・南部郡福島町や西都市地方に多いという。なお、これら南九州地方を除いては、神奈川県や山梨県の一部にもあると報告されている。

中世になると東国にも伝播し、「伊知波良2」（千葉県市原市青柳776-1、伊知波良刊行会發行）によると、半田堅三氏は本邦地下式壙の類型学的研究一特に関東地方を中心として一の論文の中で、同氏は知見の中で東日本で発見された地下式壙は160遺跡、300例を上回っているといわれ、その所在も東京・埼玉・千葉・神奈川・茨城・山梨・長野の各都県にわたっていると述べている。この中で長野県内においても「信濃考古学会誌」の中から数例をあげている。その他第一次信濃第2卷第11号昭和8年11月刊に栗岩英二氏は「発見された疑問の數々」の中で東筑摩郡波田村（波田町）で石櫛のない豊穴が五ヶ所発見され、其中の一つから勾玉が出た事を論じている。本遺跡と関係することから聞合せしたところ上波田の丸山文雄氏宅にあることが判り調査したところ出雲石製長さ3cm余のコの字形の勾玉であった。勾玉を入れてある箱書によると万延2年

(西暦1861) 屋敷の西南隅で突然長さ3間(5.4m)余に亘って落盤しその穴から出土したという。当主丸山文夫氏によると、実は屋敷の西南ではなく東南隅であった、この年は干魃で東南隅にあった杉の根本に小川から水を引くため水路を掘ったところ突然落盤しその穴から前記勾玉と仏像1像が出土し仏像は附近に仮小屋を作つて仮安置したところ利益があるというので善男善女の参詣が多かったと云う、これを松本藩が聞出して没収したと云う。仏像が残つていれば年代決定となるのが甚だおしい、伴出した勾玉は一つであるが、その他の事は判らない勾玉は少し年代が上るので伝世品である可能性が強い。この外昭和45年頃中波田の某商店の屋敷でも突然落盤し、トラック3台程の土砂を般んで掘めたという。これは前記5例の外であるから、少くとも本遺跡を含め7例の地下式墓壙が波田町にあったことになるのである。

前記伊知波良2によると地下式墓壙と関連する遺構として土壙(墓壙)、ピット(柱穴)、溝をあげている。この中で土壙(墓壙)については径100cm程の円形又は一辺100cm前後の方形のピットが地下式墓壙の近辺に見られる例があるとし、検出された深さは10cmから100cm以上とさまざまであるが、後に上部の削平のことを考えると本来は深さ100cm前後のものが多かったものであろうと述べ、出土遺物はカワラケ(内耳土器)、陶磁器、古錢、焼土、炭化物に混つて人骨片、歯などが検出されているという。その他地下式墓壙や土壙(墓壙)の周辺に柱穴状のピットが見られる。これは掘立柱の建物を構成するものと、柵状に並ぶものと、不規則の場合が多いとのべ地下式墓壙の堅坑上を取り巻く様にピットがあるものは堅坑口から雨雪の流入を防ぐ上屋があつたものと推定している。

以上のことから本遺跡に於ける地下式墓壙と土壙(墓壙)、集石墓壙群、ピット群の存在から他地方にある地下式墓壙の状態に非常に近似性をもつてゐる。松本地方に於ては塩尻市片丘南内田、同市中西条などに発見例があり、波田町に於ても今後発見の可能性は多いので充分注意して頂き度い。

(倉科 明正)

#### 参考文献

- 1 伊知波良2 千葉県市原市青柳776-1、伊和波良刊行会 (昭和54年 刊)
- 2 日本史小百科、墳墓 斎藤忠著 (昭和53年 刊)
- 3 第一次信濃第2巻第11号 信濃史学会刊 (昭和55年復刊)
- 4 日本の葬式井之口章次著 筑摩叢書 (昭和52年 刊)
- 5 塩尻市峯畠・剣宮遺跡緊急発掘調査報告書 塩尻市教育委員会 (昭和47年 刊)

葦原遺跡中世墓址群一覧表

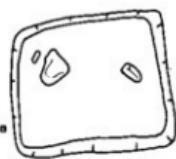
墓址番号	墓址の位置	類別	形狀	大きさ	深さ	伴出物	備考
No. 1	B T11	土壙	方形	118×100	-20		
2	A T11	タ	椭円形	94×60	-24	鉄滓(1) (180g)	
3	C T1~2	タ	タ	126×(120)	-26		カット10×10 -22、東方一部未発掘
4	C T2	タ	円形	64×(38)	-30		東方未発掘
5	C T2~3	タ	長方形	132×(80)	-33		タ
6	C T3	タ	椭円形	150×110	-67		
7	C T5~6	タ	不明	130×?	-100	人骨片	一部未掘(掘のため)
8	C T6	タ	椭円形	110×100	-90	内耳土器片2、 ふいご羽口1、 鉄滓3、 (200g)	
9	C T8	タ	円形	56×54	-20		
10	C T8	タ	不整形	64×58	-30		
11	C T8~9	タ	椭円形	84×68	-38		
12	C T9	タ	不明	172×?	-30		
13	C T9	タ	長方形	186×120	-20	内耳土器底部1 木炭	
14	C T9~10	タ	不明	130×?	-36		土壙15号と第 14号と切合
15	C T10	タ	略長方形	210×170	-26	内耳土器片2、 ふいご羽口1、 鉄滓25(大5、 小20)(480g)	
16	C T12	タ	長方形	80×?	-20		
17	C T12~13	タ	長方形	228×?	-17		
18	C T16	タ	不整形	120×94	-32	鉄たがね(1) 釘(1)	
19	C T17~18	タ	長方形	144×?	-26	鉄鎌1	
20	C T20	タ	不整形	142×50	-28		
21	C T21	タ	円形	50×48	-10		
22	C T22~23	タ	椭円形	150×?	-10	鉄滓1(25g) 内耳土器片1(1)	
23	C T24~25	タ	長不整形	206×46	-20	内耳土器片1、 鉄滓3(65g)	

墓址番号	墓址の位置	類別	形狀	大きさ	深さ	伴出物	備考	
24	B T11~12	1集石墓	方形	43×40	-15	古鉢1 (鉢文不明)	大小4つの石により箱形に 囲まれ中から 古鉢1枚出土、 内石1は石皿 である	
25	A T11~12	2	不整形	70×50	-28	内耳土器片(1)	大石2、小石 2によって一 塊となしてい る。	
26	A T12	3	タ	方形	(上)108×90 (下)110×94	-26	内耳七器片6	集石の下に方 形の基壇あり
27	C T13~14	4	タ	タ	138×?	-18		
28	C T14	5	タ	不整形	190×?	-17		
29	C T14~15	6	タ	不整形	190×?	-6	内耳土器1 片、鉄滓5 (450g) 木炭片	落込より鉄滓 10g、木炭片 多量、底に砂 を敷いてある
30	C T14~15	7	タ	略椭円形	190×130	-6	ふいご羽口3、 内耳土器片1、 鉄さい・大小18 (750g内大1 つで500g)	上に集石多量 にある
31	C T15	8	タ	不整形	50×(50)	-12	内耳土器片1	
32	C T15~16	9	タ	長方形	104×160	-14	内耳土器片3、 ふいご羽口片1、 鉄滓5 (550g)	
33	C T17~18	10	タ	不整形	220×190	-18	内耳土器片7、 ふいご羽口片3、 木炭片1、鉄滓 5,(580g)中世陶 器片1(常滑焼)	
34	C T19	11	タ	タ	180×170	-17	鉄滓11 (250g) 羽口2、内耳土 器片6、黒陶器 2、褐色片1、 すり鉢片1	
35	C T20	12	タ	円形	90×80	-16	鉄滓3 (200g) 中世陶器片1	
36	C T20~21	13	タ	不整形	80×60	-15	内耳七器片2、 鉄滓1 (70g) ふいご羽口片6、	
37	C T6	地下式土壤		上面140×130 底面 ×285	-175	漆器、火葬骨・ 木炭化物 鉄さい3 (200 g) 羽口1、中 世灰釉片1、 内耳土器		

B-11

B-12

B-13



第1号墓塙



第1号集石墓塙



第2号墓塙



第2号集石墓塙



第3号集石墓塙



A-11

A-12

A-13

0 0.5 1.0 1.5m

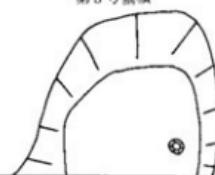
C-2

C-3

C-4

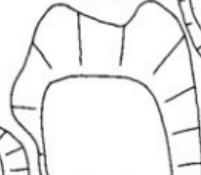


第3号墓塙



第4号墓塙

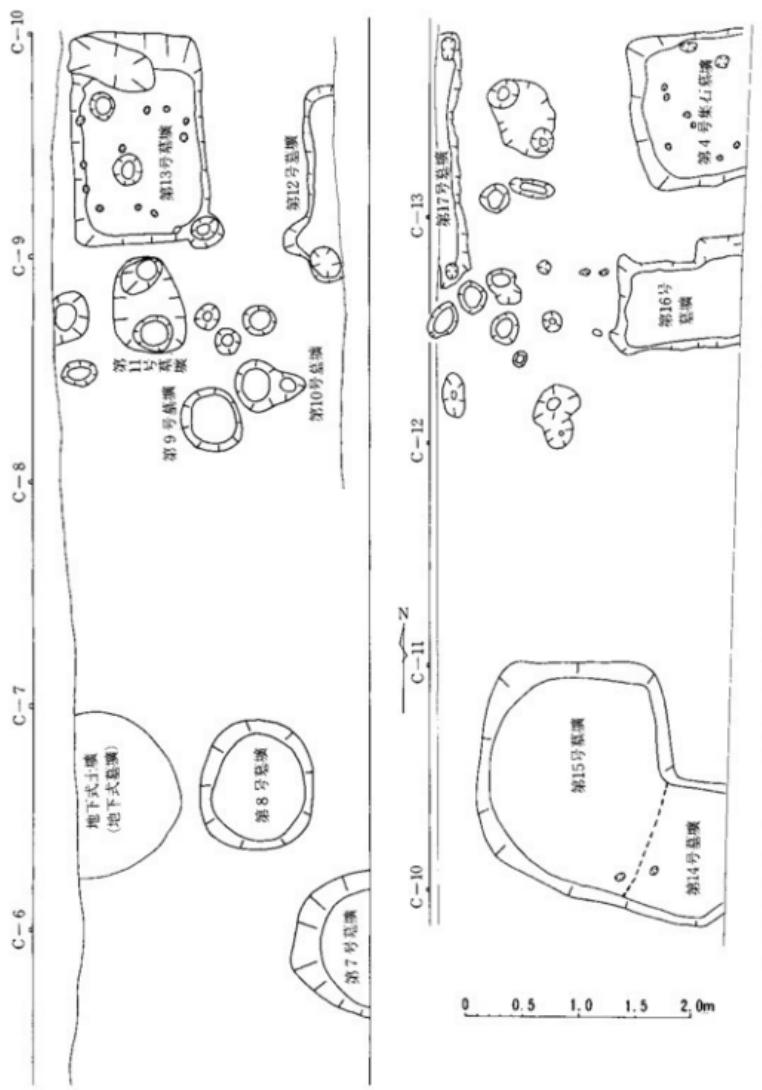
第5号墓塙



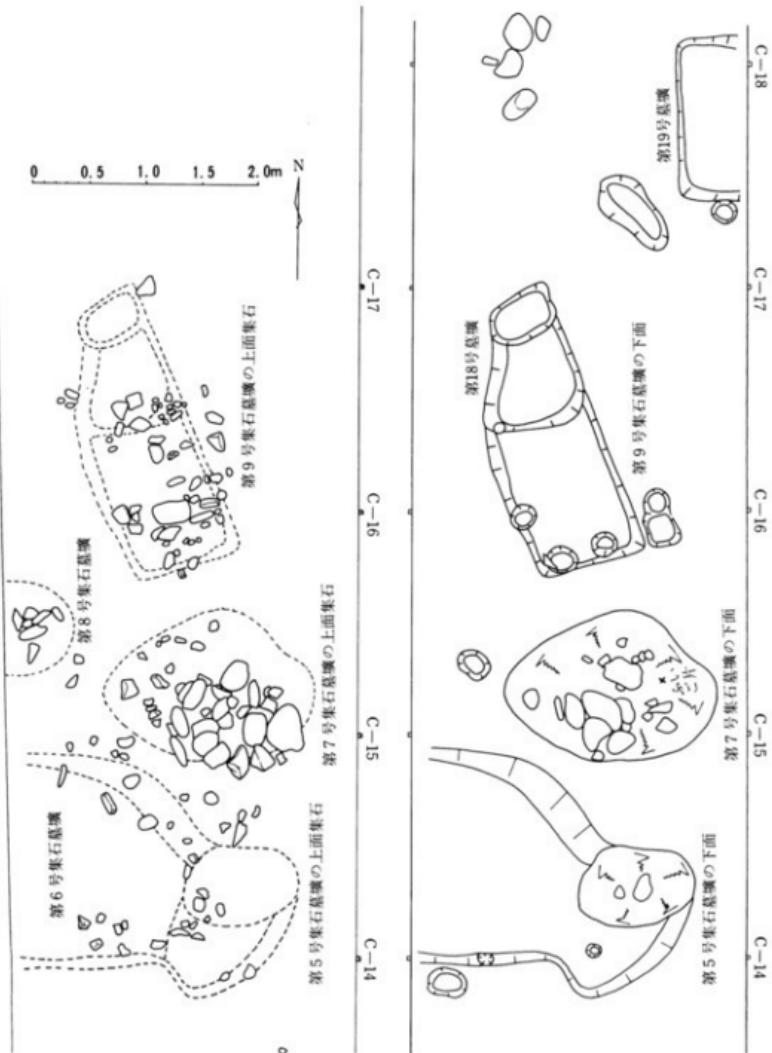
第6号墓塙



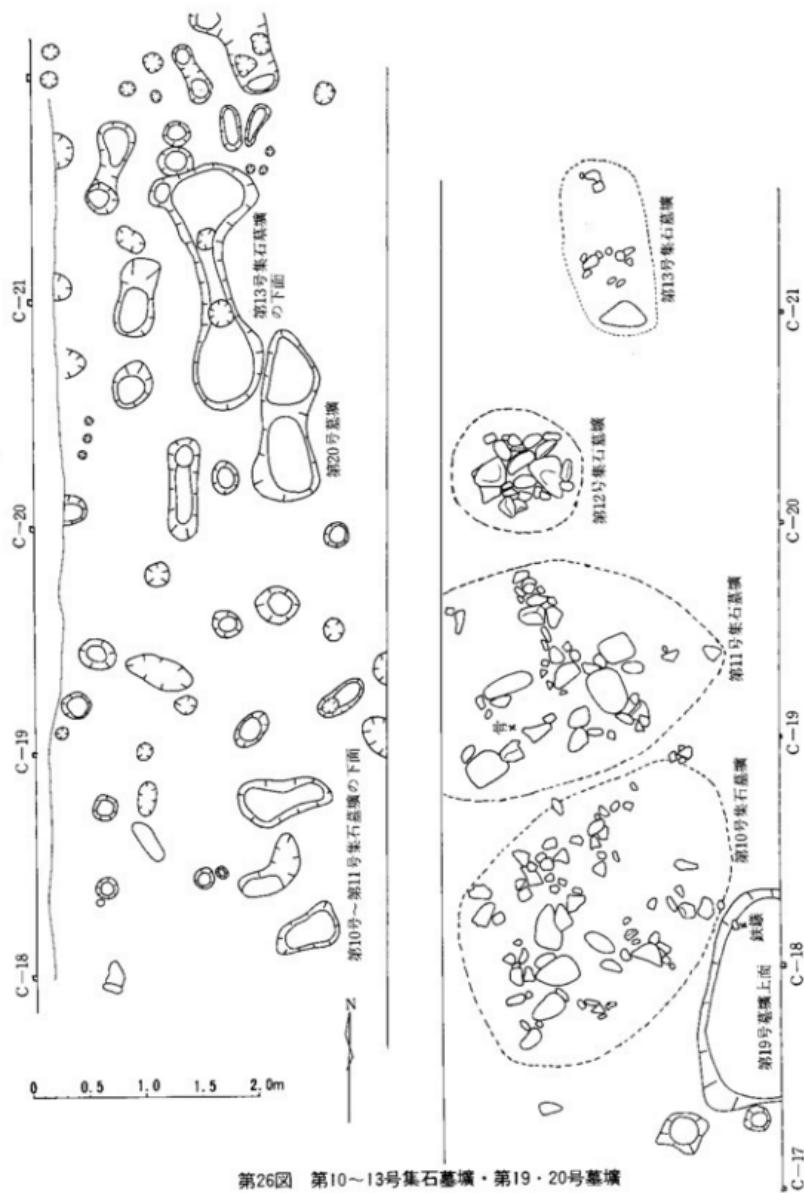
第23図 第1～3号集石墓塙・第1～6号墓塙



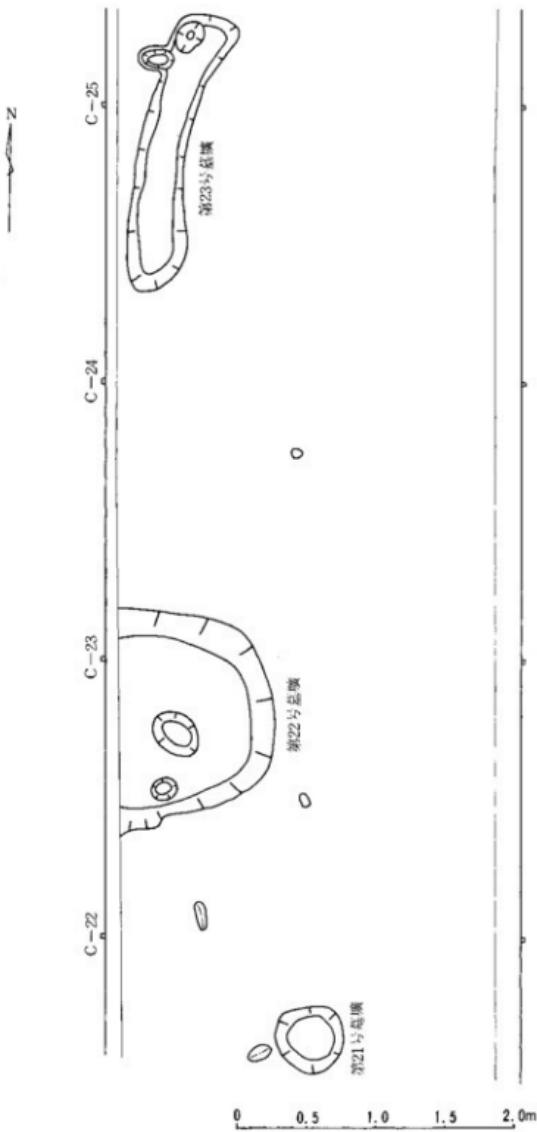
第24図 第7～17号墓壙・第4号集石墓壙・地下式土壙



第25図 第5～9号集石墓塚・第18・19号墓塚



第26図 第10～13号集石墓 墓・第19・20号墓壙



第27図 第21~23号墓墳

## 第4章 結語

葦原遺跡は、過去に松商学園高校により、前後12回に及ぶ調査がなされており、縄文中期～縄文後期に相当する大形の代表遺跡として、県内では識者にその名が知れわたっていた。遺跡の印象としては、敷石住居址が密集し、埋甕や土偶が多く、然も全国的にも紹介されている、釣手形土器や土製スプーンなどがあり、他遺跡に比し、その特異な性格が注目されていた。

今回の調査によって、はからずも意外な成果が得られたことに、調査担当者として大きな驚きを覚えてもいる。今それらの2、3をあげると、A、Bトレンチ内では、縄文中期所属の住居址が3件検出された。この中、1号竪穴住居址は、縄文中期初頭に位置づけられる、梨久保式、藤内式(主体)等の土器片を多量に出土し、該期所属の住居址として確認することができたこと。又、微量ではあるが、過去に全く知られなかった、縄文前期所属土器片も、その初頭から末にわたるもののが得られたことなどあり、これは從来の葦原遺跡の所属年代を、大きく遡上させる資料となつたこと。2号住居址は黒褐色土内に、はり床としてその床面が検出でき、更にその下層に第3号竪穴住居址が存在して確認されたが、同じ場所に住居址が複合状態を示す事例がここでも得られた。3号住居址は勝内期に属し、その全体像を追求できなかつたが、整然とした石開炉の縁辺に、くるみの殻の炭化物が得られたのは、食生活の1端をうかがわしめた。ABトレンチの10区以東は、縄文期のみるべき遺構は姿を消し、該期所属の遺物も稀少となり、縄文期の東北縁を画する如くである。

A、Bトレンチ11～13区及びCトレンチ全体にかけては、当初全く予想もしなかつた、中世所属と考えられる墓壙、集積墓壙が密集状態で検出され、葦原遺跡の性格に、大きな修正と後年における変動をもたらす。これらの墓址群は大別して3分類され、特殊遺構としての地下式墓壙1、集石墓壙13、墓壙23を数える。地下式墓壙は、Cトレンチ6区に遺構の約半分がかかり、検出される結果となった。ローム面上で確認されたこの墓壙の上面径は、直徑140cmの円形であり、表土下120cm(穴の北側)～135cm(穴の南側)まで、そのまま掘り下げられ、それから下部は傘形に穴を拡大させて、表土下235cmの墓壙底平面は円形をなし、その直徑は285cmを記録していた。この土壙内中央底部辺には、石棒状の立石を伴う灰層やローム敷が二箇所に認められ、木炭化物の粉末、更には木器に塗られた、朱漆の残存物とみられるものが出土し、松本平では初めての形態と内容をあきらかにした事例であり、今回の調査では1件にすぎなかつたが、周辺に同類発見の可能性は十分にある。集石墓壙、墓壙ともその設営年代は、伴出遺物から中世末期所属と推定される。この種遺構は、松本地方にあっては類例に乏しく、過去に塩尻市峰畠、剣の宮遺跡を発掘調査したさい、葦原よりやや先行するかと思われる時代の、墓址群が発見されているにすぎない。葦原の場合、これらの遺構がいづれも黒色耕作土～暗褐色土の、浅い層から発見されており、破壊度が少なく、その保存状態が意外に良好であったのは、稀薄なこの種遺構の内容を知る上において幸いであった。遺体の埋葬方法、副葬品、施設、喪屋等の附属施設等、

とくに考古学上、民俗学上の貴重な資料となり得ると思われる。Cトレンチ3～4区の東西方向に伸びる溝状遺構については、その目的とするものが何であったのか、又、その構築年代はいつ頃であったのか、その全体像を把握できないため明言できない。然し、塩尻市劍の宮遺跡の墓址群発見箇所にも、葦原よりやや規模を大きくするU字溝のはしづがあり、墓地（靈域）を区画した溝かとも思われるが、推測の域を出ない。

今回の調査箇所は、限定された小範囲の巾内にとどまるが、以上の如く、葦原遺跡の性格を塗りかえる、多くの貴重な遺構、遺物を明らかにすることができた。然し、今回の調査で遺跡の全容を明らかにしたものではなく、その極く一部を知るにすぎない。調査箇所の縁辺は、推測される限り多くの謎を秘めたまま、かつて先人が遺した文化を埋蔵している感があり、今後、開発等余義なくされる場合は、この点特に注意されるところもある。

調査は2月下旬と云う嚴冬期に行われたが、悪条件下にもめげず、連日作業に御参加下された多くの方々に、心から感謝の意を表したい。又、調査後、短時日に報告書の執筆事務をなされた、調査員各位に敬意を表するのみである。

(大久保知巳)



図版第1上 萩原遺跡全景



図版第1下 A・B トレンチ発掘状況



圖版第 2 上 第 1 号住居址



圖版第 2 下 第 1 号住居址遺物出土狀態



图版第3上 第2号住居址炉跡



图版第3下 第2号住居址炉址周边炭化物



図版第4上 第1号集石墓址



図版第4下 第3号集石墓址



図版第5上 第7号集石墓墳上面



図版第5下 第7号集石墓墳下面



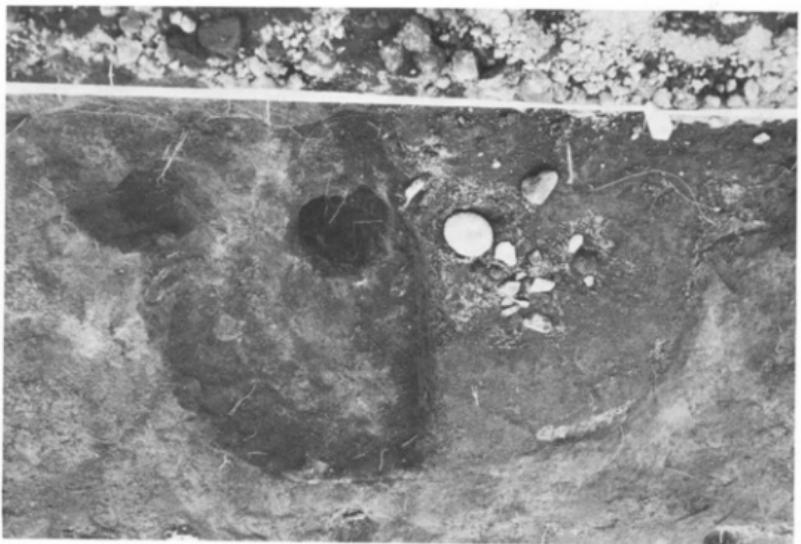
図版第6上 第12号集石墓墳



図版第6下 地下式墓壙



図版第7上 第4号集石墓塚の下面



図版第7下 第22号墓塚



図版第8上 第13号墓壙



図版第8下 墓址供養慰靈祭



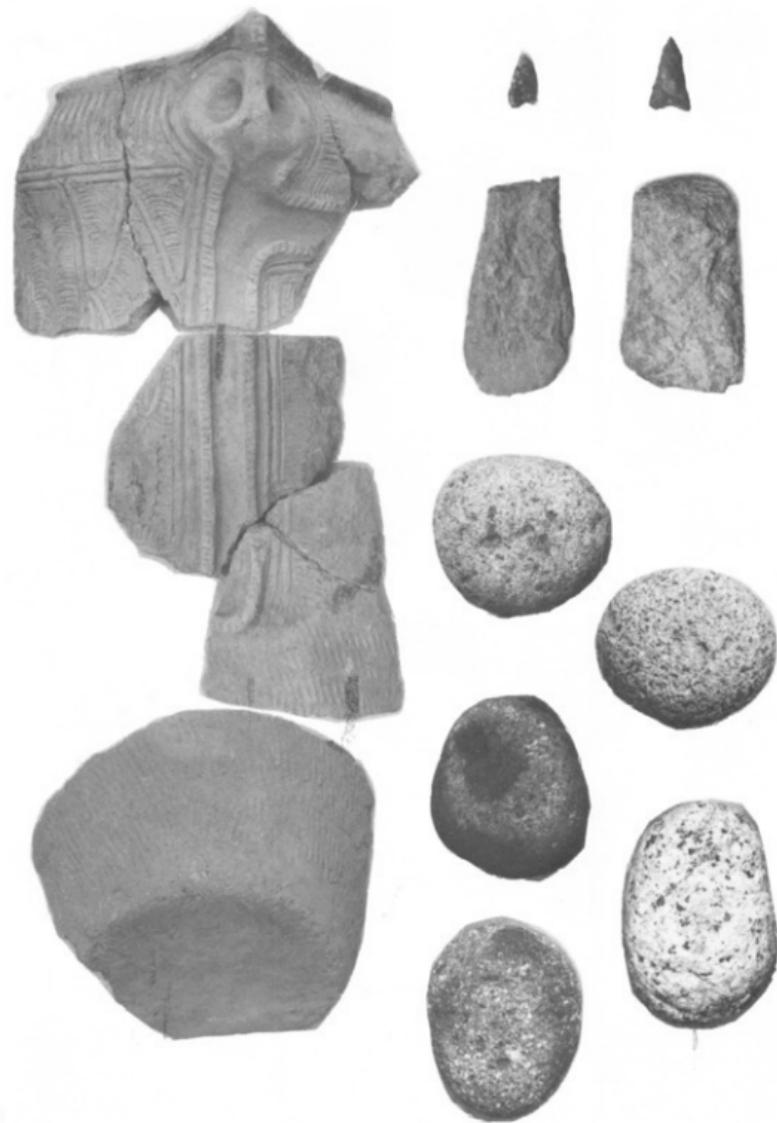
图版第 9 第 I 号住居址出土土器



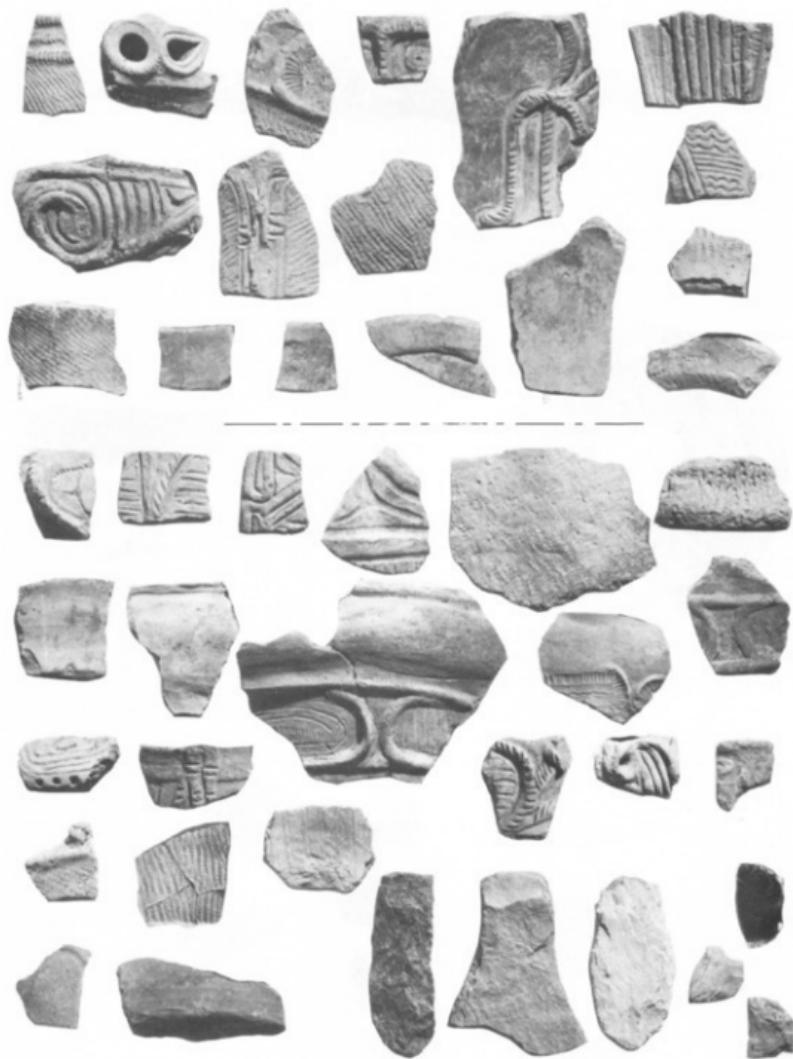
圖版第10 第1号住居址出土土器



图版第11 第1号住居址出土土器



図版第12 第1号住居址出土土器・石器



図版第13 第2号住居址上面・下面出土土器(上段)  
A トレンチ出土土器(下段)石器(右下6点)



1



2

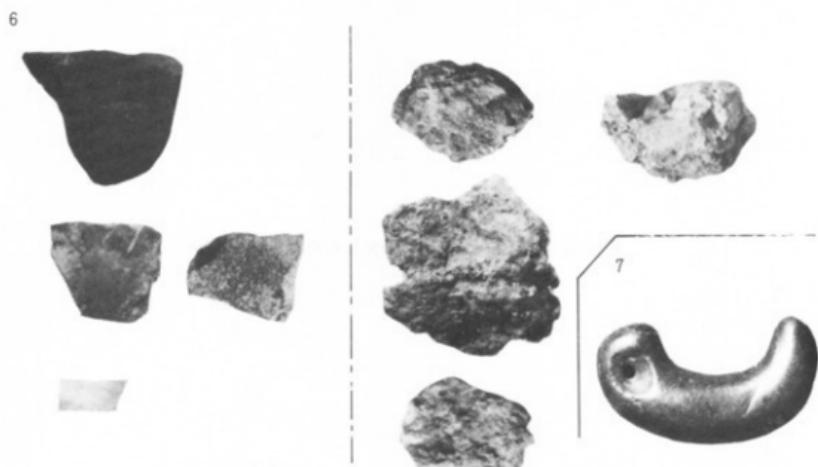
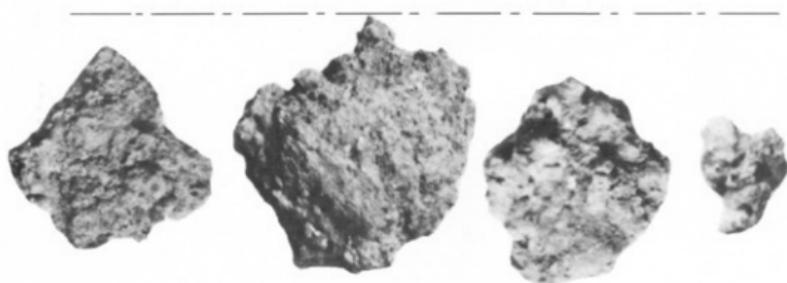
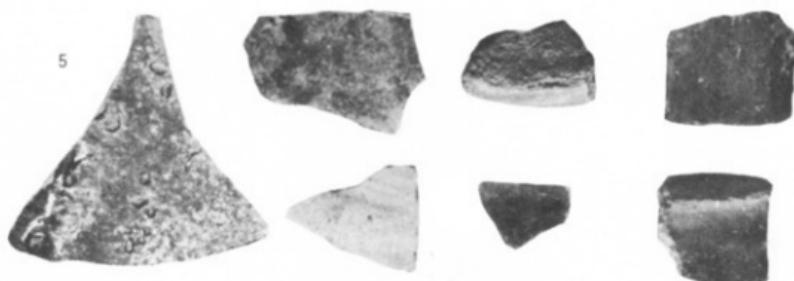
3



4



図版第14 1. 鉄鎌 2. 古銭 3. 上、たがね 下、釘  
4. 炭化物



圖版第15 5. 上段 中世陶器 下段 鐵滓

6. 左側 2例 中世陶器 右側 2例 鐵滓

7. 丸山文夫氏藏勾玉

長野県東筑摩郡波田町葦原遺跡緊急発掘調査報告書

---

著 者 大久保知巳他

発行者 波田町町長 川澄聰雄

編集者 波田町教育委員会

印刷所 電算印刷株式会社

松本市筑摩3270番地

---